薩摩
奇聞 兵学物語

始

正誤表

頁	行	誤	正
三	序一一	年冬の	正年の冬
六	本文二	山剝	山地剝
七	五	を木	草木
九	一二	勝千代	勝千代殿
一三	六	かへり	かなへり
一四	一	池大蛇	池の大蛇
一四	三	魍魎	魍魎
一四	四	午刀	牛刀
一四	九	右ふ	言ふ
一六	六	扳て	扱て
	八	未	末
	八	忠義の筋一疑り	忠義の筋に凝り
	一〇	あたまさ	あたまの
一九	六	ます〳〵	まち〳〵
二〇	一	詣方	諸方
	五	取會	取合
二三	一	千疊敷にも	千疊敷にて
二三	九	かへりみれば	かへりみ

正誤表

頁	行	誤	正
三	序一一	年冬の	年の冬
六	本文二	山剝	山地剝
七	五	を本	草木
九	一二	勝千代	勝千代殿
一三	六	かへり	かなへり
一四	一	池大蛇	池の大蛇
一四	三	魍魎	魍魎
一四	四	午刀	牛刀
一四	九	右ふ	言ふ
一六	六	抜て	扱て
八	末	忠義の筋一疑り	忠義の一筋に凝り
一〇	八	あたまこ	あたまの
一九	六	ます〳〵	まち〳〵
二〇	一	諸方	諸方
二二	五	取會	取合
二三	一	千疊敷にも	千疊敷にても
二三	九	かへりみれば	かへりみねば

頁	行	誤	正
二二	一一	はし穴	廻り穴
二四	五	このや	さかや
二五	七	宍	猪
二八	三	ひたされ	いたされ
二九	一	未方	味方
二九	五	孔吸	孔明
三二	五	入れせて	入れませて
三三	一	心岳	心岳寺
三七	一〇	あけば	あげし
四一	八	取約め	取納め
四三	三	一丈八寸	一丈八尺
五一	一	あらざらば	あらざれば
五六	四	幼の	幼き
五七	一一	忘想	妄想
六四	九	空哀	空嘆哀
六七	二	其のる	名のる
七〇	一〇	も再び	消す
七一	一	山部赤雲	山部の赤蟹

七一	一二	着得	看得	一一六	二
七二	七	葉ごと	葉のごと	一一七	六
七五	一	口情	口惜	一一八	八
七六	二	つまの	つまる	一一九	四
	三	孝佛	孝弟		
七九	六	のなせ	のませ	一二〇	二
	一〇	にがせかせ	にがせ〳〵		三
八〇	四	高麓	高麗		五
	五	項	項	一二一	五
八二	二	浮ぶべきと	とは去る	一二二	五
	一〇	うるへる	うるほへる	一二三	九
九三		露理	露程	一二四	
九五	一	怒り	怒り	一二五	一〇
九六	九	たまはんや	たまはらんや	一二六	
一〇一	一	なりと	となり	一二八	
	三	かほり	かはり	一二九	四
	七	牧野の	三字去る	一三〇	一
	八	折	打		捨ひ
一〇四	四	彌彌	一字けす		

一一二	悪しくも	悪も	
一一七	生滅意	生滅々意	
一一八	歎喜	歡喜	
一一九	四 言語なりしか	言語もありしか	
一二〇	一〇 貧	貪欲	
	二 妄相	妄想	
	三 什磨	什麼	
	五 野豕	野狐	
一二一	五 見るゆに	見る中に	
一二二	五 石磯	石礎	
一二一	九 廣々たぬ	廣々たる	
一二三	一〇 能鷹	熊鷹	
一二六	聊に	聊爾に	
一二八	愛宏	愛宕	
一二九	四 そと思ひ	そとは二字消す	
一三〇	一 捨ひ	拾ひ	

其他、變化を化、妻手を、つまで、法度をほうどなど振假名の誤あり

頁	行	誤	正
二三	一一	はし穴	廻の穴
二四	五	このや	こかや
二五	七	穴	猪
二八	三	ひたされ	いたされ
二九	一	未方	味方
三二	五	孔吸	孔明
三三	五	入れせて	入れませて
三七	一	心居	心居寺
四一	一〇	あゝば	あげし
四三	八	取約め	取納め
五一	三	一丈八寸	一丈八尺
五六	一	あらざらば	あらざれば
五七	一一	幼の	幼き
六四	四	忘想	妄想
六七	九	空哀	空異哀
七〇	二	其のる	名のる
七一	一〇	も再び	消す
	一	山部赤雲	山部の赤蟹

大正 3.3.14 内務

緒言

一本書は毛利氏の遺著にして異本多し、されど兵六の奇行に於ては然く異ならざるを以て、彼薩藩叢書を基として二三本を引証參酌し、以て茲に繪畫を附して發行す

一本書は薩藩隨一の奇書にして、文は和漢佛の三に渡りて巧に筆を染め、文流麗にして韻文的あり、秀句あり然して其奇行の如きは讀者をして殆ど倦むことを知らざらしむ、されど時に方言ありて容易に解意せざる所もあるを以て、予唯勿卒盡さゞれど、今少しく之れが解義を試みし所もあり

一兵六の活舞臺地たる吉野は、茫漠たる廣原にして、南

洲翁は冠を桂けて暫らく茲に耕作し、桐野將軍は此地に生れ、川上大將又此地に誕生す、此廣原の東丘麓は（今は鐵路をしけり）翠壁百丈斷ちて鹿兒島灣に涵入す、其の平松神社は秀吉が征西を憾みとして弓を引き、責を以て自刃せる島津金吾歳久公の遺祠なり、洋々波碧にして昔を語るがごとき青淵は、月照の魂長に消ねざる處なるを以て合せて之れを略圖に附記し、且つ又舊藩城下の地圖を附して讀者をして今昔を偲ばしめむとす其他に於ける著名の二三遺跡は不知の人の爲めに只案内的に添記す

一文字の印行は予が多忙と、予が希望に充ちざりしと、看督の足らざりし爲め、振假名及び植字の誤等多し、されど文の滑稽なると諧謔なると流麗なるとに因りて倍解讀し得るを以て、甚だ以て不手際なれど、全く不可解の處のみ唯正誤表には上しぬ、讀者願くは寛可して玩讀せられよ

一挿繪も亦異本に因りて少しく異なる、されど大體に於ては又相違するなきを以て、予は之れが生氣を添ふる爲めに、茲に山下兼秀君を煩はして、新樣の揮毫を乞ひぬ

一傳ふ本書は毛利氏所思ありて書きたりしが、時の役人等之れを窺知し、將に公に責むる處あらんとす、於是氏直ちに管を揮ひ、たゞ一夕にして改作せると云ふ、頗る珍妙の奇書なるを以て、今氏が略歴をも合せて、

次きに述ふる所あらんとす

毛利正直通稱治右衛門と云ふ、寶暦十一年三月七日、鹿兒島城下加治屋町（此地南洲翁大久保利通黑木將軍伊地知正治先生誕生地）に生る幼にして强記長して好文篤學天資大に進み和漢の學を修め易に委しく佛に通し畵をも亦嗜みたりと云ふ正直性淡直にして飾らす洒々落々嘗て名利を貪らす富貴利達を見ること恰も浮雲のごとくなりきと正直後分家して、城下草牟田に草庵を結びて生活せしが、亨和三年八月八日亨年四十三を以て病歿し、南林寺に葬らる

大石兵六夢物語

目次

一　大石兵六吉野原妖怪退治評定の話　一
二　兵六吉野發向に付群狐評定手配する話　一七
三　兵六茨木童子に出會ふ話　三四
四　兵六重富一眼坊に逢ふ話　四〇
五　兵六吉野茶屋女扳首に逢ふ話　四七
六　兵六三眼舊猿坊に逢ひ大に辛苦する話　五〇
七　兵六闇間小坊主より取圍まるゝ話　五八
八　兵六ぬつへつ坊が立ち塞るを切通る話　六二
九　兵六牛わく丸に出會危き目に逢ふ話　六六
一〇　兵六足を赤蟹より挾まれながら和歌を送答せし話　六八

一一　兵六吉野の山姥より追懸ちる〻話　七一
一二　妖怪大石兵部左工門に化けて兵六を齧す話　七六
一三　兵六吉野の妖怪お菊に縛る話　八一
一四　吉野お庄屋駈付兵六を捕ふる話　八八
一五　兵六妖怪に引かれ寺山に入りて坊主となる話　一〇三
一六　兵六石地蔵に化けたる狐二匹を殺し獲る話　一二一
一七　兵六吉野原野狐退治凱旋の話　一二三

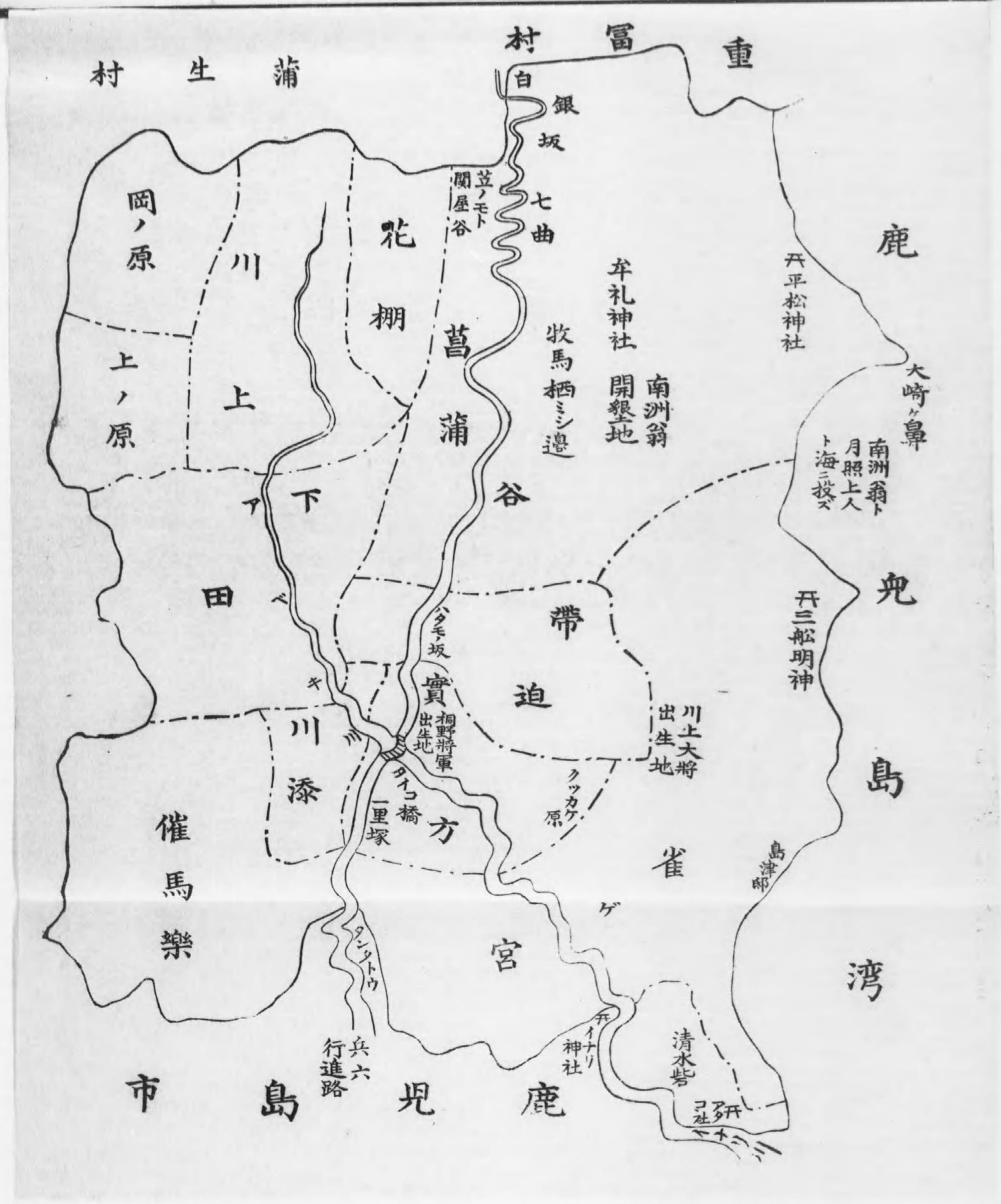
案内

一　皇太子（今上陛下）行啓記念地（至市一望の高地）　岩崎谷（南洲翁が穴居の谷）
　南洲翁終焉の地　公園は城山
二　大磯（仙巖園）は磯御茶屋（磯舊主邸）
三　照國神社（島津家名君齊彬公を祀る）　は（城山山下）
四　舊藩主の墓地は　本立寺　福昌寺及其後常安峯
五　西田橋（舊主上下路の名橋）　は甲突川に架す
六　俊寛堰記念碑は　御着屋
七　文之和尚の碑は　大龍寺跡（大龍小學校内）
八　英艦來寇彈痕は　御厩（縣立病院）下石壁
九　來寇記念碑　沖小島（錦江灣）
一〇　月照の墓は　相國寺（市の南）
一一　南洲大久保東鄕元帥の誕生地は　加治屋町
一二　南洲祠堂は　淨光明寺
一三　田之浦遊園地は　稻荷川口の高丘
一四　夏箕瀑布は　同川上る七八丁
一五　鹿兒島三清水は　二王堂水（本立寺近）隆盛院水（隆盛院跡）
　阿彌陀水（阿彌陀寺跡市の西常盤町の奥）
十六　⊕は當時士族屋敷の符なり
　一、二、三、九、一二、一三、及常安峯は眺望を得て風光絶佳の地　一國は高さ二三間巾一二間翠壁聳立
　の水清く流る又小遊の地

一二 八 英御殊蓮寺（鶴岡）
一二 七 文殊の神の神 大聖寺（鶴岡）
一三 六 鶴岡寶蔵院
一四 五 西田（鶴岡）
一五 四 薬師堂の主尊 本立寺 鶴岡常蔵寺
一六 三 照岡神社（鶴岡）
一七 二 大鶴（鶴岡）
一七 一 南鶴金蔵寺の鶴 公園（鶴岡）
一七 一 皇太子（鶴岡）

内容

北吉野原
櫻馬場
妙国寺
尾畔
仙眼寺
唐湊
玉龍寺
龍吟寺
延金院
八幡
塩ハマ
正建寺
騎射場
花岡
日置
伊セ
本丸
二丸
付
城
櫻島ヘ去ル一里
錦江湾
玉持院
稲荷
大明神
梅ノ名所
御茶屋
サクラノ名所
兵六
玉龍山
知工光院
大東院
正真軒
不断光院
明光寺
大乗寺
安楽良院
天神
勝院
良泉寺
隆盛院
上寺
南泉寺
吉祥院
観音院
柿本寺
玉里御茶屋


蒲生村
冨重村
白銀坂
七曲
岡ノ原
川上
上ノ原
花棚
菖蒲谷
牧馬栖ミシ邊
南洲翁開墾地
牟礼神社
開平松神社
鹿兜島湾
大崎ヶ鼻
南洲翁ト月照上人ト海ニ投ズ
田ベ
下ア
滯迫
川上大將出生地
開三船明神
川添
實
桐野將軍出生地
タイコ橋
一里塚
クッカケ原
方
雀ゲ宮
島津邸
催馬樂
タンタトウ
兵六行進路
イナリ神社
清水砦
鹿児島市

大石兵六夢物語

自序

夫れ前佛は既に去り、後佛は未た世に出でず、夢の中間に夢を見て、迷の暗の深き夜は、人の心も暗くして、誠の道に入る事かたし、其くらみたる處よりして、曳いて明なるところに至らしむるは、釋氏方便の教に近うして、聊か兵六が本意にかなへり、蓋し人生れて物に恐るゝことあるは、情の常なり、聖人は暗君暴虐の政に恐れ、凡人は利害得失のたぐひを恐る、鼻垂親父は風引かん事を恐れ、あんまく兒（あまるこ子供なり　おふせぬ子なり手）は、我向來らんことを恐る、その恐るゝ所を察して、恐れざる所を慎ましむるは、夜啼をとゞむる手段にして、まゝはざるの教に基

けり、されば痴人の面前に夢を語らず、ふる味噌も、日頃なめざるにもあらねど、知つて知らざる顔に、もてなすは、又唐土のむかしの教にあらずや、こひねがはくは闕黨の小童輩、そのあやしきを笑ふことなくんば可なり、つら〳〵思ふに、大石兵六夢物語は、我先師川上先生の、書き玉ふ書にして、其頃世上のもてあそびものとはなれりける、惜哉年月已に移り、星霜既に換はりて、今は其跡方さへ見るものなし、其言葉の古雅にしてやすらかに、清簡にしていさぎよかりし事、なか〳〵末の世の能く及ぶ所にあらず、それより下つがた、兵六を以て世に鳴るもの、林にしげき木の葉よりも多く、畠に生ふる芋かづらよりもひろ〳〵し、異説紛々雷同して、其間にど

ろめき出づるに、誰れこさし出して、其耳を驚かす程の言葉も見侍らず、或は煩雑にしてやかましく、或は簡略にして事短ければ、さながら山鳥の尾の末長く、鶉の尾のこびたるに似たり、二つながら全からねば、いづれも差し措きて取るに足らず、近世怡顔齋が持ち出せる所の大石こそ、重からず輕からず、平直にして其要を得たれば、是こそ下和が玉葛、むかしをかへす言の葉こやいはん、左ながら鹿兒島の月の光を含み、吉野の花のあや殘る所なきが如く、後の人、兵六が事跡を求むるに志あらんもの、是に依つて之れを寫さば、恐らくは其差はざるに庶幾からんか、予今年冬の、公の務につきて、旅宿を大隅國鹿屋村中名の在所にむすぶ、其所の百姓諸右工門

といふものあり、一日兵六物語一卷を携へ來るに、雨中の徒然、是を見るに、誰れが作とは知らねども、其辭かたくなにしていふにたらす、適々いひ應せたるに似て、又癖める多し、實に遠近のたつきもしらぬ、山田舍めきて、猿の鳴く音を呼子鳥とき〻あやまり、狐を狸に取り違へし言の葉も多かりき、されは其誤りを知つて改めざるは、迷ひの夢を重ぬるに似て其罪深しとや云ふべき、さればやむことを得す、其あらましを書きただせば、只管晝寢のかど枕に似て、ひとへにうつけたることばとやいはん、然れども此書たるや、初は世の盛衰を明かし、治に乱を忘れざるの趣きを說き、勇士の交は義理を專らにし、氣節を嗜むべきを教へ、中程散じて萬事に移り、

進むに疾きものは、其災忽ち至るを知らしめ、力をたのみて已れを高ぶるものは、遂に天狗の蹴爪にかゝり、才にほこりて知を專とするときは、永く野狐の邪氣になやまされ、色に迷ふものは、自縛の繩にくゝられ、利慾を擅にするものは、必ず天の網にかゝる〻事をいましめ、終には山梁の雌雉、時に隨ふを以て道とすることを說げり、見んもの其言葉のうつけたるを以て、其本意をゆるがせにすべからず只に戯々兢々の心をして日々にます〳〵確かならしめんことを願ふものなり、時は天明四年霜月猫の日、床の下の土、漫りにかき散らせば、却つて鼠輩の物笑ひとやならん、しかれども彼川上氏が爲めには、獨り後世の揚子雲と自賛し、また側は自畫を副へ侍れば

、我も亦兵六がたわけたるに、少しも劣らざるものなり

藪原實房

大石兵六夢物語

一　吉野原妖怪退治評定の話

吉野の春の花ざかり、龍田の秋の紅なるは、理の常なり、菰子かざ花を咲き、侍のうそをつくは道の正しきにあらず、特牛(牡牛)車をはこび、驛路の駒の重きを荷ふは自然の性なり、鶏の夕べをとなへ、狐の人をたぶらかすは、道の自然にあらず、十月雷を發し、六月雪を降らす類も、皆是天地の變體、陰陽のひとしからざるものなり、伸るものを神と云ひ、かがめるものを、鬼と名づく、鬼神のなす所や神妙不測、理をきはむるの到れるにあらずんば、未だよく明め易からざるものなり、聖人のかたり給は

ざること誠に所以あるかな、然りと雖天下また非常の理なきにしもあらず、雀海底に入りて濱ぐりと化し、菜虫園圃に出で〻小蝶と變ずる類、學者疑なしとせず、莊周が百年のたはむれ、邯鄲十年の榮花も、極樂まわればかなしみの基となる、越王三年のこらはれも、兵雲一夜の峯入も、また何ぞくるしみとするに足らんや、覺め來れば皆是一場の夢物語、いでさらば語り明さん足引の、山鳥の尾の長々と、頃は略應元年八月下旬の事かとよ、況して言葉も不知火の、筑紫の果ての荒蝦夷に、性は大石、名は兵六と云ふものあり、其友達には吉野の市助を初め、大川隼人之助、春田主左工門、曲淵杢次郎、大久保彦山坊

なんど云へる何れも劣らぬほふれ者共、是等を宗徒の頭として、幕下の面々數十人、或時は磯山（磯山は今の島津公爵邸附近の山一帶をさして云ふ昔時此山一帶は老櫻古梅參差として枝を交へて生し居れるを以て春色閑かなる頃に至らは老幼男女來り遊ぶもの頗る多かりしかど彼の生麥のことありて英艦來らんとすと流説するや時の爲政家調所正工門の計らひにて灣内上瀬砲臺を建築せんとて悉く磯山附近の木石を手當り次第に伐截して搬出せしを以て今は全く昔日の俤をも存せざるに至れりと云ふ）の花見に兒達を誘ひ琵琶天吹（天吹は尺八に似て小さく堅に映くものにして上に四つの竅と下に一つの竅とありて吹かば頗る悲壯の音を發す若し秋冬の交之れを吹めば亮々殆も空を抉くるの韻をなす近頃まで士氣振作の一）の興を催し、或時は紫原（市と南谷山村との境界をなす丘陵にして狐狸窟すと云ひ傳へたり）の明月に夜獵を企て兎を狩りて高麗入り（豐公朝鮮征伐に從ひし義弘公の高麗打ち入りのこと）の古へを養ひ、其交淡くして水の潔きが如く、かたうしては能く

金を斷つの思をなせりしかのみならず、夕に友を以て武を講し、朝に文を學びて仁をたすけ、互に睦じく隔てなく、同し浦波の友千鳥波の夜晝かたらひける、或時吉野の市助進み出でて云ふ樣は、如何に方々鳴りを靜めて聞き給へ、此頃吉野實方（吉野の圖中にあり）の邊より白銀の間に異形異類の化物出で〻、往來の人をたぶらかし、や〻もすれば坊主になすこの聞へあり、夫れ妖怪の起るや異端の學世にはびこるの兆、仁義の道すたれ果つるの基、甚だ以て安からぬ事なり、さればもろこし宋朝の古、十月ほと〻きす天津橋上に叫ぶ、邵康節嘆じて不吉の兆象とす、我朝の昔春三月小男鹿の聲あり、禁庭に聞ゆ、陰陽師變亂の知らしめと云ふ、爰に於て人皆愼を加へしとかや、

且つ又圓融院の御宇天延四年の夏の頃、京都五條のわたりより化物出で〻洛中にた〻りをなし、往還の妨となるよし聞へければ、主上恭なくも宸襟をなやまさせ給ひ、其頃天下に隱もなき天文の博士播摩守安部晴明を清涼殿に召し出され、占はせ給ふ古きむかしのためしもあり、幸大久保彦山は山伏の役なれば、かねて習ひしいろは占、弘法大師の四目錄も、か〻る時節の早業なれば、早くも八卦を起し、此吉凶を定めよかしと云ふ、彦山坊げにもと打ちうなづき、東に向ひ禮拜し、指を數へ暫く沈吟して袖の內に占ひ申す樣、それおもんみれば、天地の廣きも阿云の二字に約まり、うらなひもまた陰陽の二つを以て、吉凶を定む、陰、陽の爲めに剋せらる〻時は吉な

り、陽、陰の爲めに剋せらるゝ時は凶なり、今見る占ひのおもて陰長く、陽退かんとす、是則山剝の卦なり、小人官に道に跨り、君子山野にかくるゝの卦、天下の武道まさに衰へんとするの象なり、今二三十年も過ぎなば、士の道はあるかなきかの體におちぶれ、富貴なるものは仁義を忘れ、貧しきものは團扇細工の本手もなく成りはて、神は賽錢におぼれ、佛は造物をむさぼり、町人は兩刀を帶して武士にまぎれ、あやまちては御役人かと疑はれ、出家僧門は妻子を隱し持つて、俗人の如く、知らざるものは一向宗かと膽をつぶし魚目を眞珠とたぶらかし、眞鍮を黃金と僞り、物讀み坊主を大儒と取違へ、鼓弓三味線を雅樂と覺ゐ、女子は男の横座を奪ひ、醫者は疫

癘の神にたそれ山伏も亦野狐のたゝり（土地の古風として賤劣の輩族妬或失戀等のことあるや其遺恨を晴さんが爲めに狐狸の栖める原頭古祠に至りて先づ咒の言を語り狐狸に其害をなさしめんことを憑むこれを野狐やりと云ふ其法必ず魚或は小豆の握り飯をば與ふ其害を受けて病苦になやめるを野狐つきと云ふ其病苦を解脫さするを野狐放しと云ふ此業多く兵道師のなす所にして夜之れを行ふ近くまで行はれしが近頃この業を耳にすることなし男子は決しで之れをなさず）に苦しみ、異なるを木あやしき器物を弄んで、世の冗費を厭はず、追從輕薄を專らとして、氣節を失ひ、鎧は羅紗の多葉粉入、縮緬羽織の代物になり、經傳書籍はうたひ本、淨瑠璃本と引きかへて、果ては發句前句の反古にすたり、鶴の冠、鷹の長袖、猫の鬢張、狸の皮羽織、皆裏はらの世態どなるべし、是れと云ふも畢意末の世の、有樣、武士の小路は、荆棘の爲めにふさがり、利口表裏の横馬場は、却

つて其屋を潤うし、常盤の松と枝を爭ひ、先祖重代持ち傳への道具も、空しく市井の塵にけがれ、弓は袋に矢の根は箱に、大刀、長刀、手槍、鐵砲等に到るまで、殘らす質屋の庫に納まり、過きたる世の習ひ外の患ひ内の苦しみと云ふことを知らざる人々、皆華美になりもて行き、驕りを極め、欲をほしいままにして、金銀とさへ云へば、いかなる孔子と云へども尻がびくめく、達磨の眼もくらむと聞く、そのくらみたる所より煩悩の野狐すかさず飛ひ入り、追へども去らす敲けども放れず、種々轉變して妖となり、怪となるものと見ねたり、誠にいたはしきことかなし、斯くまで邪氣の盛んなる上からは、不動の空縛り、雲門の六十捧も追付へがらず、火生三昧も用ゆる

に處なし、あはれ阪上の田村公はおはさんか、八幡太郎義家の再來もがな、源三位頼政どのにてもましまさば、彼の怪物は何の手入らず逃去らせまじものを、武道弓勢の威力、次第に衰へ行くこと、上杉謙信殿の歎息に現然たるこそ口惜しけれ、然れども拙者もいまた柿八伏、修業未熟の占かたなれば、さしきばめては云ひがたけれど、今見る所、先つこの通りと云ふ、時に曲淵李郎治かたはらに在りしが、つくゝ之を聞き、朱鞘の長だち押し廻し、ごふすあたまの(兵見髮姿を云ふ)折細く、威那もの(利功ぶつて)がほにて言ふ樣は、むかし我等が先祖は、甲陽の武田家に仕へしよしなるが、嘗つて云ひ傳へしことあり、信玄公が未だ勝千代と申せし比、幾年とも知れぬ古狸、信玄公

の木馬と化け、種々の妖怪をなせしこころ、信玄公其の時僅がに十三歳の兒なれど、其心勇猛の君にてましませしかば、少しもひるみ給ふことなく、軍術兵法共に得たりと、武田重代の寶刃抜きもち、只一打に平げ給ふ、されば凶事も變つてかへつて吉相となり、遂に數ヶ國の太守と仰がれ、名大將の名をあげられ、摩利友天とはおがまれ給ふ、其頃天下の武士たるもの、皆首を引いて其幕下に出でんことをねがふ今時大兒達（兒の大柄のもの）の能く及びめさるる所にあらず、去程に吉野の化物も、今通りにて召置がたく、狐狸の輩に楯をつかれては、侍の云ひ分立たず色々いふは臆するに似たり、思案分別するにも及ばず、石にてもせよ金にてもせよ、御旗楯なくも照覽あれ

、早く彼の野狐を打ち平げ、其根を速に絶つにあらずんば、後々大なるわざはひとなるべし、三略にも二葉を切らざれは斧斤を用ゆるに至るべしと見ゐ侍らぎや、惡を改めて善に移し、凶を變じて吉となすは、皆是聖人孔子の徒なり、油斷大敵事は速なるをよろしとす、もし帖佐（吉野原より東北方二里の處にある村）國分（仝しく東五六里の村）の二才（大方十五歳以上の男子を云ふ）共に先をせられては、未來永々の恥辱、たまさか百萬石の城下に生れし詮もなし、國の爲め人の爲め、早く化物に誅戮を加へずんはあるべからず、且つ又武者修業の爲めにもなれは、彼山本勘助が足は折れてもしびれても、今霄皆〻馳せ向ひ、吉野の原を切り仕明け、唐芋（薩摩芋を土地にては唐芋と云ふこれは唐より傳はりしを以てなり）作る合點せよと、甲州武士の意氣地を顯

はし、血眼だちてせき立つれば、大川隼人助やすからぬ事に思ひ云ふ樣は、それ我國は西方金氣の行はるゝ地に當り、古代武勇の俗たり、何ぞ他國の風義をしたはんや、然るに杢郎治、此頃新參の身分として、入らざる甲陽の引言かな、我れいやしくも生命を當國に全うし、大川氏と名乘り、隼人之助と知れ渡りたるものが、彼新參の友がらに、口を聞かれては頗る本意を失ふに似たり、しかし信玄にもせよ、眞劍にもせよ、木刃一本にて打ち倒し、日頃の英氣を知らせんものをと、例の曲意地忽ち顯はれ、膝を抱へてまくり出で〻曰く、杢郎治がいふ所甚た敵を恐れたるに似たり、かの化物共の爲めに士の鋒先を差向け、大勢立ち騷がん事世上の批判も如何はしく、殊に吉野は御鷹場内（藩主の御鷹場）、旁以て然るべからず、腕に覺の輩はなきか、誰にても一人行き向ひ、しるしをあけて來らん者は、第一國家の忠義、且つは武門の手柄なり、しがしながら各の意見、一先づ承らんといふ、時に兵六からく〻と打ち笑ひ、誠に以て大川氏が深き分別、能くも我が心にかへり、されば古坂の上の田村麿は、唯一人の計略を以て、鈴鹿山の鬼を平げ、源の頼光は、貞光季武公時保昌綱等の數輩を率るて、數多の鬼賊をころし、又渡邊の綱は、唯一騎駈向ひ、羅生門にて茨木を切り、其後も和州宇多の森にて、鬼神に逢ひて其腕を得たり、又平惟茂は信州戸隱山の紅葉狩りにあるきて鬼を切り、多田の滿仲は住吉神社に籠り、託宣を受け、唯一箭に多田

の池大蛇を射殺して、其跡に名城を築き、且つ又漢の高祖は、自から三尺の劒を提げ、芒碭山に白蛇を斬りて、天下に義兵を擧げ給へり、和漢共に惡鬼魍魎を打つに、未だ大勢打ち向ひたる例を聞かず、鷄をさくに何んぞ牛刀を用ひんや、邪は正に敵すへかず、たまさか人間界に生を受け、化物の爲めに本心を動かし、大勢つれ立ち城下をも騷がし驚かさんこと、返す〳〵も末練の至り、われも昔の大石氏、徒黨をくむは天下の御法度、先祖内藏之助も深く之れをいましめたり、右ふに及ばぬ事ながら、某一騎馳せ向ひ、今月今夜々討かけ、化物のやつばら一匹も殘さず、打ち平げんこと何より以て心やすし、然れども吉野の儀は、御城下近在、鹿兒島を去ること僅か

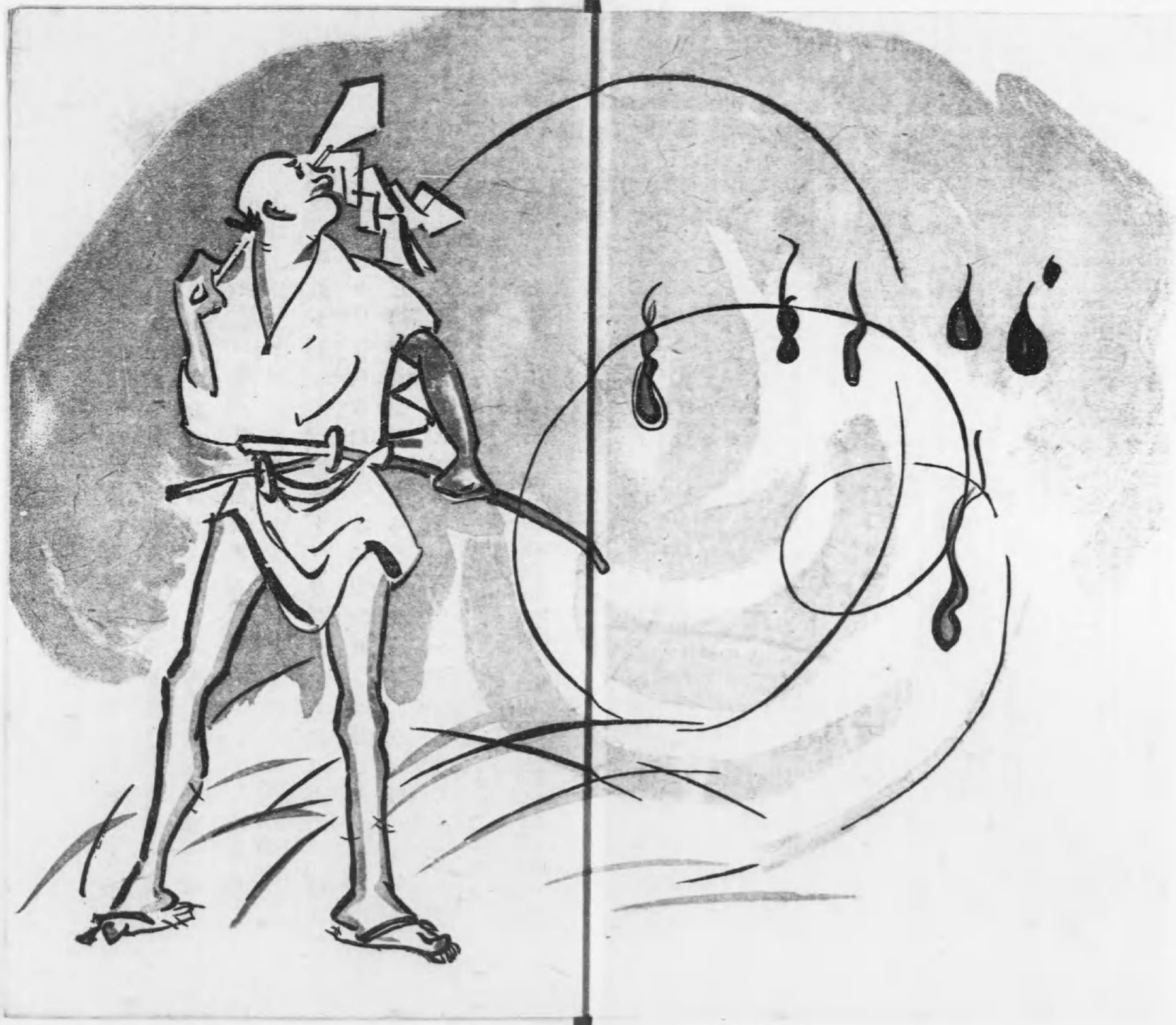
に三里、其上永作地面の事なれば、隱密には切仕明がたし、早速此段庄屋へ取次、御差圖を得奉り、若しも御免と菊の酒、ひたものさすか經節、武士の身の上似合はねど、吉野原を一手に申し受け、思ふ所のたはけもの、只一打ちに打ち倒し瘡疱人のねむりをさまさんは（俗に狐化物となりて看病し能く病者を寢ねつかせて疱瘡人の瘡を食ふと云へり）いかばかりか面白からん、されど請け座で利を絞るは諸人の迷惑差知れて、恨み歎きの數々を、積れば綿の雪の段、こゝに死んではたまるべき、民の寒さをしろしめす、最明寺殿の御時代とは、裏はらの違ひ、常世如きの輩は、粟の飯さへたぎらねば、飢てや死なん、こごへてや果てん、木綿は高し夜は長し、衣はうすし片そぎの、紙子の羽織糊氣もなく、つらき泪の

種子が島、霜夜にすびく玉ぐすり、たんと込めたる時節柄、あすから狐の皮衣、着るより外に工夫はなし、斯くおちぶれても錆劍一本、痩せたれとも蹠栗毛、ちぎれたれとも濾帷子、ひるがへつては討死と、思ひ極めし大石が、角を立てたる眼ざし、唯ものがほとは見ねざりけり、春田主左工門聞より早く進み出で、扨て〳〵志和地の城の矢文以來、久々振りにいさぎよき言葉を承るものかな、男庄内柳川ながれて未の今の世に、かゝる忠義の、筋に、疑りかたまりし大石あらんとは、若し其方が行き向ひ、吉野の原の仇かたき、首尾よく打て歸りなば、我々が腰の刀を引出物、取持兒（昔は女色を禁ずる爲めに男色頗る盛なりしがば其愛せらるゝ少年と二才とは義理の交り甚だ固く互に何彼と實兄弟の親の如くに取持て故に一方を取持兒一方を取持二才と云ふ今に殘れる義勇の話吉田大藏と平田三五郎とは其尤も交りの堅きものなりしと云ふ男色又衆風なりと雖今其聲を耳にせざるに至りて此處の士氣も亦自ら傾きつゝあると聞くが如しの一番杯（二才と兒とは其交義實の兄弟の如く相愛し相親めり故に一朝別離のことあるや他を措きて惜別の情深かりき依りて其離延に於ける別杯は先づ一番に交酬せり）芋蜻豆腐の茶かけ飯馬鹿の名取のけんちやん汁、雉子の鷄鳥鳶烏、燒酎白酒元よりの事、望み通りと勇められ、兵六勇氣や增りけん、力身切てぞ歸りける

二　兵六吉野發向に付群狐評定手配する話

去る程に、兵六は家路に歸り、父と母とに此由を、かくし喰ひの先祖棚、からいも勝の御佛餉、座頭のあたまと握りめし（握飯の大なるものを土地にてサツツンツブと云ふ即ち座頭の圓程大なるを云ふなり）三尺湯手（三尺手式に握飯を包みて旋立つ樣なり）に珠數つなぎ、首にかけてぞ立出づる、最早子

の刻九つの、鐘を相圖に吉野山、白銀（已に前に注すべき所なりしかど都合ありて此處に於て白銀坂は吉野岡を越して重富村に下る嶮坂にして岩壁相出て丶曲折崎嶇たること里餘昔は丈に餘る萱、人馬をも蔽ふ草、蓬々として茂りたるを以つて路塞りて行く人も之れを難坂急路せる嶮坂なりきとされど今は行路の人こそ少けれ野拓け畑作られたるも畫なほ寂しき坂路を過きば昔日の谷の水咽べは原頭の鬼哭して止まざりきと云ふ其俤今に殘れり）さして急ぎ行く、心の内こそいさましけれ、腕は谷山波の平（市を南に距る二里許にあり即ち鹿兒島灣に沿へる村に谷山と云へるあり波の平は其村の一部落の字名なり昔此處に波平安行と云ふ名工刀鍛治ありて名刀を鍛錬せし處にして其跡今尚ほ殘れりと云ふ）三枚合せの大ぬた刃、こしにさすがの兵六なれば、たとへ千万のいかづちにもせよ、にらみ落してくれんもの、まして吉野のたはけもの、何のおそれのあるべきぞ、只一打に打ち倒し、二才中間に土産物、兒の御緣（男色の盛なりし頃美少年に逢ひ或は其他何事か喜ぶべき緣故のありし時に云へり）に大石が、一廉ならぬ手柄ぞと、



獨りごとしてゐられ（圖中兵六其他附屬の繪に於て見る如き頗る威張れる姿を云ふ即ち山陽が詩中に衣軒に至り袖腕に至ると詠せられし古武士の姿にて當る者あらば碎けても退かぬと云ふ體）ゆく、心の内そ殊勝なれ、早やこの事が吉野の原にも聞ゑ、一白、二赤、三黑、四天狐、五斑、背はげなどを宗徒として、その數いくらも芝のもと、外戸の口まで並み居たり、あなおびただの狐勢、評議ます〳〵一決せず、古例紛せと叫び合ふ、聲もしばしは止まざりけり、暫くありて牢禮の岡（一部の名なれど此處にては吉野岡を總稱して云へり）の方より、是こそ大將とおぼしき、白毛のおねたる白狐、童狐を携へよろめき來り、左右を屹とかへり見れは、一座の狐皆謹んで蹲踞せり則しづ〳〵として、中央に進み出で、狐の皮の敷布團に坐し、聲をはげま

していふ樣は、いかに方々詣方の手配りいまだくるまらぬか、敵の旗先追付見ゆんに、長評議して夜が明けたらは、神樂のあとの篝築こやらにて、興のさめたる事ならん、圖をはづすは何よりのおくれ、尾をあらはすは狐家のきず、この節の取會は、鷄の生きほろむしり、藁苞肴のぬすみ喰ひとは、大きなるちがひ、敵は人間にして然も正道、味方は畜生にして然も邪術、勝算彼にありて敗形我にあり、今更謀略拙くして、却つてこゝならんは、口借しかるべき事ごもなり、軍を見て矢ははかれず、抑も軍事の臨機應變、虛を以て實とし、實を以て虛に見せかけ、正奇の備へ具はりて、敵を待つは三略の敎にして、即ち予がかねて說き聞かする所なれど、いつも秋風たちて上の空、雲井のよそに聞きなして、狐の皮の襟卷は、古風の何のと云ふのみか、老狐の詞を何とも思はず、穴を出つれは笑ひの〳〵じる、かるがゆゑに、今こそかゝる不慮の急事に臨んで、皆尻尾がうろたへ廻る、こゝを以てかねて無事なる時、萬事の上に氣をくはり、功ある狐の意見をも聞き、我が道を能く穿鑿する時は謀もすみやかに出で〳〵、自然と大功をも立つるものなり、されはこそ古人も時やすけれどもあやうきを忘れざるを以て、武備とすといへり、夏の日衣をつくりて冬の寒さにそなへ、晴天にからかさを張りて雨をまつ、それ聖經の中庸にも、凡そ事前にさだむれは敢へてつまづかずといへり、抑も我が道は孫武が所謂詭道なり、これと似るべ

きにはあられねども、いづれの道も皆然り、若狐ども以來をよく慎むべし、つらく此頃の狐仲間の風俗を見るに、おのが勉むべき家業はさしをき、やゝもすれば磯の御山の猿を友とし、吉野の奥の鹿と交はり、木の實をむさぼり、唐芋の蔓を引き揚げ、粟の穂を盗み、碁石の豆金、貝殻の小判を用いすつるを手柄とおぼへ、けふもけふもと呉羽鳥、あやしの草木器物を弄び、きじの羽衣錦を重ね、鷄の烏帽子を冠り、大名をまね、身分をわすれ、位をさしこへ、さゝめき渡つておはしますれど、腦中には見識の一物もなく、先年奈須野の原狐狩りの御條書には、穴の戸口は三尺よりひろからず、土壁にしてたるき柱もけづらず、僅かにぬけ穴一つこの御定めなりしがど

も、當分にいたつては千疊敷にもそばいこの取沙汰、土壁變じて石垣となり、茅葺化して瓦となり、玉をちりばめ五色をいろどり、玄關がゝりは人間に似たれど、心は誠の古狐、尾もあらはれて淺間敷有樣、眼のあきらかならん人、さげすみ(墨繩)の程もはづかしからずや、犬にあひては眞先に逃げはしり、鼠に逢ふては身命の危きをもおそれず、内証の奢りは日々に千金を費せども、軍役の手當ども一向思ひもよらず、まして父母妻子の養もかへりみれば、朋友緣者の難儀をも救はず、夜は篠田の葛の葉に通ひ、千代八千代もと契をむすび、晝は兎のひるねを業とし、已れが家業は夢にも知らず、尾のふり樣はし穴のほり樣、甚以て不鍛錬なれば、何として戰場に立ち

向ふを得ん、何れの心中いかに〳〵と勵ませば、皆一言の言葉もなく唯畏りてぞ居たりける、時に軍師と思ぼしき城が谷（市の北部にあり）の丈高狐（擬作）坂東聲にて進み出でゝ申す樣、それ兵法は虛をうち勞に乘ずと云ひ、且つ三軍の前には敵の美を稱せずとこのや、我退きて兵六か人となるをみるに、すこしの學文を鼻の先にかけ、わづかの武編を庇尻にあらはし、人にほこり已れを高ぶり、多言にして口舌をつゝしまず、是則かれか禍の門にして、しかも樞機のいましめなく、耳目の戸ざし嚴重ならざれば、しのびをいるゝにたよりあり、況んや名慾のすきまひろく、色慾の戸口も常にひらけり、我か輩是等のひまゝ〳〵より賣め入り、五臟六腑を喰ひやぶり、恭敬篤實の石垣を踏みこぼち、終に明鏡の臺を乘り取り、虛靈不昧の本心の光を奪はんに、支ゆるものは苦もあらじ、其他打つべきの虛はいかほどもあり、其上敵は僅か一人味方の狐は數千疋、殊に吉野は要害の地、むかし大塔の宮のこもらせ給ひし舊跡（比喩なり）なれば、山嶮にして路ほそく川深うして苔なめらかなり、東は三里海岸に面し巖石屏風を立てたる如くなれば、雉兎蒭蕘のかよひすら心にまかせず、宍と云ふ犬もむなしく歸る、南に石塲なまごろし、且つ又田之迫（吉野村の入口にあり）と云ふ關所あり、俗鞦韆籌と訛る、西は川上花欄（吉野村の字）につづき吉田蒲生（吉野岡の後にある二つの村なり）の難所を固め、北は白銀關屋の谷、七曲なるつづら折り、內には牟禮の高岡（以上は皆字名或地の名なり）に自然石窟の天守をあげ、四方十里を目

の下に見おろし、外には東福清水の砦あり（別に砦あるにあらず市の東北清水町の後ろ丘阜なり）または實方、矢上の故壘あり、殊に牧堀深けれは狠ことても越ゆることを得ず、土堤を築き上げ、堀をさらへ、四時の普請怠ることなければ、猫の入るべきすきまもなし、大手搦手二つの城戸をさしふさぎ、牧司往來の梯子をはね、大鼓橋（圖にあり）を引落す程ならば、今日本にはびこれる源平赤白大犬小犬むく犬葦、唐天笠阿蘭陀犬（洋犬をかく云ふ）犬戎國まで一體に合併し、喧々として寄せ來るとも、鏖殺にせんこと我が胸中にあり、其上兵糧は、此野生産無盡藏、いなご、鈴蟲、きりぎりす、雉子の玉子の玉ぐすり、山の如くにたくはへあれば、千窟籠城（來るかりて）數ならず、我等吉野に籠穴すること十年なりとも、狐糧丸藥に事かかず、若しまた萬が一も味方敗北ことならば、野元の岡に後詰をたのみ、紫原に加勢を乞ひ、小野原良永吉（市の西北山丘の麓の村々）の幕下を催し、福山（前に云へる國府より東）春山青色野、比志島御牧（鹿兒島の西北の部村々）の一族共を招かば其勢數万に及ぶべし、其時敵を深々と引き寄せ、內外よりさしはさみ、或は錢目三つ眼（錢目は文錢の穴形の目即ち錢目三つ目何れも繪にあり）あるひは鬼神大天狗、山姥諸所要害の透間なく、化け立て化け立て、打つ程ならば、綱金時保昌ことても皆魂を失はん、いづれも若き狐の輩、其志を一途に極め、機に望み變に應じ、千變萬化の秘術をつくし、前にあるかことすれば忽然ことして後にすほぬけ（ぬけ去ること）御大將の御下知を守りて、日頃の御恩を報ずべし、かばねは犬の餌食ことなり、肉は刃の上にふ

すともゝクハンとも聲を立つる可からす、況乎耳をすぼめて、兵六に降り、尾をあらはして人に笑はれ、茅狐の家名を落すべからず、抑も敵をいたして、敵にひたされざるの心術、我兵法の題目たり、各右の趣を心頭にさしはさみ、御趣意通りを取違へなく、赤白の毛色を相印とし、馬と問はば鹿と答へよ、同志喰をなす可らす、手立軍配扳目なく、武名をあぐるは、此時なり、恩賞は其功によるべし、主戰の仕度早く〳〵と聲を揚げ、手をさしまねき下知すれば、勇み進みて大に喜び、刺毛草（さるとりいばらのことを土地にてクワクラと云ふ）の乱杭いけ（山ゞ）の逆茂木、すきまも見せず引きかけて、兵六が來らば笑落さんと、薄の穂鎗を持ち揃へ、敵こそ遅しと待かけたり、此時大將欣然として色を直し

、盛んなる哉未方の狐兵、固より四足は健かに、變化も殊更今まさり、虎の威勢を借るにも及ばす、味方の勝利は疑なし、勇々しくも丈高はからひつるものかな、軍學の師範家程あつて、我思ふ所と符節を合せたるが如し、孔吸珊瑜二人揃つて再來するとも、いかでこれには及ぶべき、それがし最前能く〳〵諸將を恥しめたるは、其おこたりをはけまさんがためなり、强將のもとに弱卒なし、今もかはらぬ狐の意氣地、昔の世にもおとるものかは、抑も我は變化の名家、三國傳來天竺の班足太子の塚の神、周の代にては褒似と變じ、日本に渡つて玉藻の前と名を改め、殺生石と形を變じ、人を取ること數しれず、いかなる勇猛英傑の名將といへども、我一たび化粧して、美

蓉丹花の唇をひるがへさば、皆其本性をこらかされ、放埒ものと奈須の原、毒氣朦々としてあたりを拂ふて居たりし所、はからずも玄翁和尚が手杖に擲き碎かれ、狐追物の矢先、ふせぐに穴なく、無念ながらも彼兩介が武威に怖れ、心筑紫に逃け下り、よしの〻原に來てさへも、最早千餘年に及べり、己に白髮三千丈の老狐となり、稻荷の鳥居幾度か越ねつらん、されば天狐の位に登りてよりこのかた、九天の上にもあらはれ、六地の下にもひそまり、火もねて燒くことあたはず、水に入りてもおぼらす事を得ず、鬼神もはかり難く、法力をも施すこと難く、無碍自在を得て、いたらぬ國の野邊もなく、居ながら千里の遠きを覺り、未萌未然の事に通ず、昔時武田信玄一期の弓箭に不覺を取らず、我も一生尾先を人間に見せたることなし、これと云ふもかねて鹿兒島へ忍びの狐を入れ置き、一夜に夜廻りを七度半、猫に化けさせ鼠にも化けさせ、倉の内から納戸のすみまで窺はすれば、妹背の中のむつごとより、錢米仕繰りの密談、質川の流れ涯、周章辛苦の歎き物語まで、皆殘らず聞き屆くれば、所帶の貧富、人柄の强弱、賢不肖、鏡にかけて見るよりも明なり、其上分別才覺のある、手傳狐に似合はせの所帶を持たせ、龜屋藤筋洲崎の邊、又は萩原天神山諏訪の森邊（市内にあ）、南泉院の堀の土手、其他新橋射場の下、御厩下や堀の面（以上いづれも市内にあり）、要所殘らず出店を張り、世の風說を見聞きするにより、昨夜稻荷山（圖にあり）の斑方より、早

打の注進、追々櫛の齒を挽くが如く告け來るこいへども、我少しも驚くことなし、是かねてよく胸中に謀を治定せしが故なり、全體彼兵六と云ふものは、智勇兼備の大石が末孫、家の傳授も受けをる由なれば、かたぎうちには自在妙用を得たりときく、然れども彼はいまだ二十にも足らぬ若輩者、いまだ智識も定まらず、人道の味も知らざる小冠者なれば、打つにすきまはいかほどもあるべし、況んや血氣の勇なるをや、先祖内藏之助(比登)がごとき情のねれたるものにあらず、向ふ鐵壁をくだくこいへども、少しも恐るゝにたらず、夫れ小敵のかたきは、却つて大敵の擒となるべし、此節の取合はむかし楠正成が赤坂の城に日本勢を引受け、宇都宮治部少輔公綱をだ

ませし手段の如く、初は遠攻にして彼れが勇氣をくじき一里塚(圖に)の遠箭、礫物瀬戸(圖に)の茨木童子帶迫(圖に)にはさんとたましをぬけ首二つ、鞍馬天狗を中入にて、關屋に山姥簑婆尉、あなおそろしの穴熊手、家の傳授、の釣狐(以上何れも繪にあり)、古流新狐入れせで四十八手の數々を、今宵のこらず藝盡し、若手の狐原たましを入れて見物せよ、我等二匹がのみごむからは、安部泰名もねんねこと、篠田の森に取り倒す、まして兵六でときのたはけもの、血氣殘らず吸ひたをし、彼れが勇氣のたゆめる所を、すかさず見極め、若紫の色をもて、欺き引きそびき心缶寺山(圖に)におびき入れ、坊主にそりまはすこと、掌をかへすよりもいと易し、だまれ〳〵といふ日影、入るを相圖

に打ち立てと、しめし合せの占釘の、もり目も見ぬ小鳥籠、ぬくる武田の糸からくり、いどもかしこきはかりごと、聞くに身の毛もよだちけり

三　兵六茨木童子に出會の話

男なるかな兵六は、燕の荆軻が思をなし、壯士一たび去りてはまたかへらじと、草鞋の鼻緒しつかとしめ、跡見かへりも千地藏、薄氣味わるき左御門坂、風蕭々となまぐさき鼓の河原（圖にあり）を打ち過ぎて、行けば程なく御番所の、門もとざゝぬ御代なれば、千代の春千歳の秋と打ち詠め、嘯の阿の山（嘯は口笛なり阿の山は彼の天吹の曲に阿の山に阿の山にちでたちつれてしやしやめこしやめこと云ふ曲あり）口の琵琶、喉の糸筋はるばると、いそぐや旅の夜の道、くらきを照らす三佛の、習惠光院の鐘の聲、無明の夢をやさますらん、笛と大鼓はなけれども、催馬樂（吉野村の字）も跡に見て、人の心の劍と鳴る、石切場をもかるゝと、登れば鹿兒島の、札の辻より一里塚、二里塚越ゑて三里塚、四里にも足らぬ道なれど、旅寢となればものうきに、恩愛の契あさからぬ、我が古郷の兒達を、行衞も知らず思ひおき、心ぼそくも行くまゝに、實方（紙作りの名所）近くなるかみの、紙打つ音のおびたゞやこれはしたりと兵六が、力も已に遠近の、野山の鬼火の遠篝、さながら夏の螢原、すはやかたぎの打つて出るか、又は後詰の化物かと、此大勢はいかな事、案に甚だ相違せり、丁度下田や（圖にあり）川添（圖にあり）の山に、もみちの錦の旗、雲か花かとあやしま

る、扨では狐の落し穴、ほりつらねたる八陣と、おもへばあしも乱がみ、髻山よりひか〳〵とほのめきいづるいなづまは、大山伏の打火かと、我とむかふる蛇の穴や、あなすさまじの氣色やと、むねに擣衣の靼韃、大鼓の橋（貴方に あり）を打ら渡り、吉野の城（城砦ある にあらず）に寄せたりけり、川より北、牟禮の方を見あぐれば、峯に白馬、赤馬、月毛の駒、深山おろしにいな〳〵きて、相圖のときの聲をあげ、麓には數千の狐、おの〳〵鼻先をそろへて、尻尾の玉をかゞやかし（狐の尻に玉ありて光を發すると云ひ傳ふ）錦繡しきたる地のごとし、この有樣を見てよりは、はかりごと〳〵は夢にも知らず、はやり切つたる兵六なれば、傍若無人の化物ども、いで一息に責めほふり、一匹も殘らず打ちおとし、串にさ

〳〵んと牙をかみ、大に腹を柿のさね（核をさねと呼ぶ柿のさね梅のさねなど云ふ）實方越にて行くま〳〵に、名さへおそろしこ〳〵は早や磔物瀬戸の坂の下、磴と氣色のふりかはる、是れはいかにと夕月の、影もくもりて眞暗く、神火のけぶりまくり出で、夕立雨のむら雲の、かゝる左の松山より、いで喰はんと飛び出づる、姿を見れば双眼は、百練の鏡に朱をそゝぎたるが如く、唇は耳の涯までさけひらき、上下の齒をくひちがひ、頭の毛髪は赤針がねをのべたるに似て、眞逆さまに冠をつき、青息吹いていふ樣は、我を何とか思ふらん、京六波羅に名をあげば、茨木童子の幽靈なり、五條の橋は遠けれど、打てば其聲どんと鳴る、大鼓橋は程近し、むかし渡邊の綱は、羅生門にて參會の節、金札一兩に目

がくれ、右のかひなはあやまちしたれど、左の腕先未だ達者、おのれ如きの小冠者は、指の先きにてこりころし、只一口といふまゝに熊手をさしのべ耳をひき、ねいさらねいさと引く綱が、むかしの世とは殊の外、覺悟の外のちがひにて、尻にひたし(襁褓なり即しめし)を付けはがね、外の見掛はいらひごけれど、心吉野の上氣兵子、何事あらば一番にわれすゝまんとかねての廣言、鹿兒島よりもひろけれど、皆是駄馬の皮の敷圃團、ふとんの上の川およぎ、これこれ兵六我こそは、酒天童子にさしつぎて茨木童子とて名をあぐる、古今名譽の酒盛數寄、馬の煎骨人の骨、鷄の煎揚にても、もてこひもてこひ、鎗薙刀の串肴、何本よりとも賞翫いたす、をさへる手本のじんじやうに鼻

の毛なりと切り落し、鬚切丸の名をあけさつしやれ、兵六は鬼が理屈に詰められて、抜きたる大刀を鞘の内、おさむる手持無沙汰にて、ふるひおの〳〵きいふ樣は、仰の如く昨夜の廣言、今更何とも御斷り、格護の外の御腕力、なかなか針もたてられず、なき名ぞと人にはいふてありぬべし、おのが心のもし問はゞ、梓弓いで我は綱ではござらぬ、くされ縄、やくにもた〳〵ぬものと答へん、壯士一度去りて又かへらじと、申せしことも皆僞り、ゆるし給へや我が袖を、かゝる手織の太五郎布なれど、ひかばなどか切れざらん、刀の柄を握りすくめ、釜土坂も高しとせず、たゞ一飛にとびこゑて、あとみずそはか（梵語呪文の末に云ふ此處は退去の意なり）二三町、いきをもつかず逃げて行く

四　兵六重留一眼坊に出會漸く切拔くる話

扨て兵六は、からきいのちを、やう〳〵助かり、流る〻汗の玉清水、ひたすも道理下の帶、帶迫（吉野の地名）迄はにげのびたり、道のゆく手の石地藏、願をよすがに立ち寄りて、有り難く我身の運を、御守り給はれ三滿惠蘇和加と唱へ居る處に、重留の方より、托鉢の音くはんくはんと、觀音經の聲高く、見上ぐる樣なる大山伏、足ごり高く出で來る、顏に自慢の鼻高く、口は鰐口にして耳のもとまでひらき、目は一眼にして、圓鏡の、ひかりを奪ひ、淨樂院と般若院と半分出しの中らはぎ、燒酎のまう口元にて、大音あげて名のる樣、抑も我は長谷の觀音堂を建立せし、炭焚五郎作が末孫、目一つ五郎次（皆撰名）と云ふも

のなり、不幸にして、世をそむける墨染にもあらず、僅かに黒米一升も貰らへば、そこでよさゝの讃岐の金毘羅山、四石取（四國にかけたるものにしてむかしの士族は藩政に依り米四石つゝ戴けり故に云ふ）りに、まさらぬものおとゝ、おもひて、重留の内劔がひらといふ處に、身をやつし麻の袂をすみにそめ、重留一眼坊と名を改め、蓮生法師が跡をつぎ、役の小角がいにしへを學ぶ、然れども近年打續きの凶作、田舍諸在は、神祭さへうとければ、赤豆のめしも勸農方、餘計冗費を稠敷御取約めあれば、粥ばかりにてあらひの齋米、團子も咽喉に入る事なし、朝晩世話を燒き鼠、ぬかやのすまひ難儀なれば、一先鹿兒島に立越ゐ、身に赤衣かけまくも、かたしけなくも、御祈禱山伏をねがひ、壇方廣く廻り喰ひ、麥の飯

にはところ〻汁、山のいもからうおぎとも、立身せんと思ふ例しは、漢の揚震それとは違ひ、天地懸隔賄賂すき、我が身の用心題目に、慾心さかしき小天狗が、いつしかかかる大天狗と、羽翼をかはし、はづかしながら、かやうのあさましきすがたとは成りはてたり、それおもんみれば、唐芋の皮、外に赤白の色をあらはすは則是阿云の二字にかたどり、すみ菜の根球に、甘き苦き味をふくむは、本是菩薩の化身なればなり、琉球大和の田舍は勿論、衆生のいのちをすくひ給ふ、夫不動明王の尊体といつば、金と玉とにてみがきたて、赤黒忿怒のかたちを示し、いかりの髪はさかさまに立ち、うごく時は天地にふるひ、靜なる時は巾着の内にもかくれ、白紅の光は、奈落の底に徹し、三寸の利劍は仁田忠常か寶刀を欺き、富士の裾野に、奥ふかき雪のはだへの、人穴をうがち、後の火焔は、狐の尻の尾にたとへ一丈八寸のしばり縄は、則是屁屎蔓（敵等にからむ惡草にて もまば甚い臭氣を發す）の類なり、金剛夜叉の正体といつば、こゑありてかたちなく、匂ありて色見ねず、是をうてども、くだけ散らず、是れを切れども、きるべからず、手にもとれず、目にも見ねず、有りと思へば無し、なしと思へば有り、三世の諸佛、曆代の祖師、我等如きの衆生まで、皆腹中に具足せり、若し不審ならばこれ見よ、南無から唐芋、蘇和加、腹張つたやらんと氣張れば、忽ち其正体をあらはす、其羽風に當るものは、皆成佛疑なし、火生三昧も我が宗門の秘密とするに足らず、皆是釋伽の

小便壺、壺の内にも費長房、三千世界を眼前に、見るとはうそそな事、春夏秋冬戀無情、發句俳諧段々付け、詩歌管絃くはん〳〵こ、さけぶは拙者が持ち前なり、五戒を守りしは以前の事、今は心の活境界、かつをのふしの味噌摺小木（味噌をする木なり）足もすりこぎ（方々歩きて足の力もなくなりしこと）、露霜に塩たれ衣一枚びら（貧者を形容せし詞）錫杖までも質に入れ、親の意見も世のそしりも、構ふものかは、夜々はかくれがくれに取倒し、人の肉喰ひ、異なもの數寄、一つのくせはあるものを、我にはゆるせ僧正遍昭、皆手ゆるしの精進落し、追付銀出し油をも、あたまに付て見せ申さん、さてもくささや、人くさし爰の地藏のうしろかげ、御通夜申す人やある、夜中は人目も憚らず、頭なりとも尻なりとも、皆是

拙者が好物、後からでも、前からでも、勝手次第にきこしめす、こよひ一夜を明さんと、につこと笑うて立ちよれば、兵六何かは以てたまるべき、肝魂も天にとび、土堤より下にかつぱと落ち、南無や薩埵の地藏尊、念佛唱ふる衆生には、十惡五逆のくるしみも、ゆるし給ふとの御ちかひ、いかで水にはなし給ふまじ、齡根のかずの煎豆は、おろかのこと、味噌かずまでも相添へて、今宵早速手向けんと、一心不乱に祈誓をこらし、夢身になして給はれば、くはんすの蓋でも扣かんと、力の限り念誦すれば、不思議や奇怪の大山伏、喰ふ心をたちまちかはし、言葉をやはらげ言ふ樣は、そなたは何とてふるひおそるるや、未だ霜もふらす雪も降らず、仙氣ふるふは格別な

こと、安本丹ても參らせん、臆病蟲には第一妙藥、腰元のぐにやぐにやするは只事ならず、杵のたゝりか白のこがめか、たゞしは半釜の神の御しらせか、人をたすくる沙門の役、ちかうよらつしやれ、一加持祈つてまひらせんと、ありとあらゆる事までも、神にかこつけ佛にかこつけ、人を迷はす野狐法師、うそをつらぬく、くわくくらの、珠數の糸長く、まじなひするぞ氣味わるし、東方には降三世明王、北の方には金剛夜叉明王、雀の宮には雀の靈魂、牟禮の岡には馬頭觀音、西の方催馬樂には銅樂の神、實方には半紙皮紙（實方の邊は紙を製する所なり皮紙とは俗にちり紙をさして云ふ半紙より廣くして美濃紙よりせまし今殆んど絶へたり）豆の紙（百田紙は）百田の紙實の神さま、又の身社、穴倉の明神、猫の神、犬の神、皆同祖神、糞壺藥師、一二三四五六地藏、七社にて八夜九夜、仕掛けて十度も續け神、御大工殿が仕事する、かなつく腰にて祈りなば、なごかしるしのなからんや、腹ふくれて評判の、いろはにほへゞ、ぼろん〳〵と飛びあがり、つばきちらし祈りければ、さても不思議や兵六が、心の野狐もはなれ神、正躰たちまち元氣づき、扨てはおのれもばけものよと、三尺八寸抜きもちて、下手な蜻蛉腰高く、只一打にと切り付れは、火ばかりぱつと石佛、岩にもせよとこゝろざす、その念力や通りけん、今が世までも切り跡の、のこりけるこそ不思議なれ、ひとへに天狗のだませしと、人皆舌をふるひけり

五　兵六吉野茶屋をんな抜首に逢ふ話

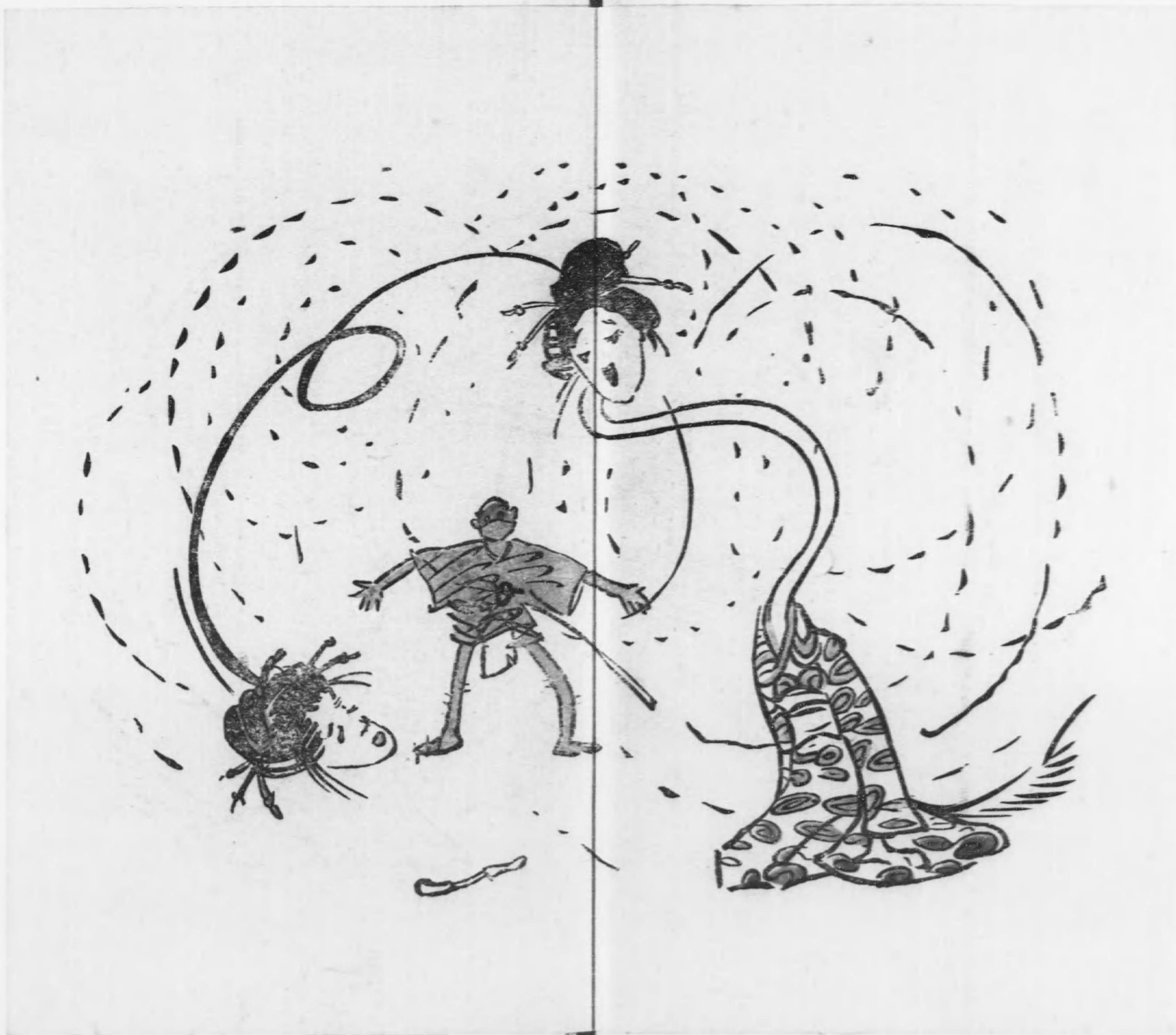
海棠秋に至つてはなをひらき、紅梅冬に先だちて色をあらはすは、たのむべき事にあらず、狂候風氣これをだませばなり、聖語佛說を聞きて寒山子を眞似、兵六祈念によつて王將軍がおもひをなすも、又たのむべき事にあらず、野狐是をたぶらかせばなり、夫れ本性の勇あり、血氣の勇あり、本性の勇は、川のながれてやゝざるが如く、血涸れ易し、淺野の大石は本性の勇、吉野の兵六は血氣の勇、名同しうして其輕重の同しからざるは何ぞや、蓋し分別あると分別なきとによれり、分別あるものは廉耻を知る、廉耻を知るものは事に望んで臆することなし、分別なきものは廉耻を知らず、廉恥を知らざるが故に、其なす所

百事皆浮氣なり、是則ち現に野狐の爲めに、こらかさるゝが故、彼大石は目迷ひ心乱れて、石菩薩の御手を切落してより、兵六忽ち我慢の浮氣にたぶらかされ、みづから百千人にもすぐたるうぬぼれをなし、空嘯きて謠ふ樣、もしも道中で化物捕らば、わしが手柄とおぼしめせ、情あるかよ、あらそらうそちや、べんざら、はがねのつよければ、此刀にて二つ三つ四つに、茄子のふと煮汁、葛掛原のほとりにて、松の飛根に腰をかけ、一首の歌をぞつらねける

ふみまよふ吉野奥のいかならん
おのが心のくらきやみ路に

と打ち吟したる折りふしに、左右の藪の陰ひなたに、阿云

のかたちひよろ〳〵さい、ひよろりと出でしところてん、
塩梅吉野の二軒茶屋、茶屋の女子が二人づれ、結ぶ純子
の廣幅帶、三寸下れば膝の奥、甘酒壺や白砂糖壺、饅頭
燒餅馬の團子、牛の牡丹餅腐れ面山簡略餅（いづれも皆狐が人をとらめすに用ひる材料にして馬のくそ牛の牡丹餅は牛のくそなり人をとらかして之れを食はせ或は之れを與ふると云ふ）御馬乘り
でもお勝手よ、是れこれこゝでわし共がぬくめ立てたる
麁相な豆、召し上げませんか御望次第と立出でて、まね
く薄の初尾花、穂にあらはれていふ樣は、是れ兵さん、
爰は名に負ふ戀の山、あはんをうらむ葛掛原、身は葛の
葉のはゞかりながら、こちよりちよつと申しあげませう
、さても過ぎにしさらの年、吉野の牧の御馬追、はじめ
て君を三島江や、海人のたくひの夜はもね、晝はこ



がれて思へども、風のたよりもあらざらば、いひ送るべきことの葉も、泣く〳〵月日をいたづらに、思ひくらして螢びの、きへはてなんも白川の、安珍さまではなけれども、男ひとりに女ふたり、引くてあまたの戀ぐるま、わすれがたきはお前の面影、こゞめ難きは戀慕の慕の字、書いておくらん玉章の、雁にたのむも御鷹場内なれば、取るにとられぬ樣の袖、いかなる神のめぐみにて、大石樣の御腰元、今こそそれと岩田帶、むすぶ契のゑにしありて、今宵は君に逢坂の、關の清水にじつくりと、たがひにつもるものがたり、空音をはかる曉の、鳥は鳴いてもまだ夜は夜中、こゝろしづかにねてゆかしやれと、すがり付くこそおそろしや、兵六も弱冠ながら早や己に、

男ざかり近の浦、色の陸奥知らぬでもなし、もとよりすきの不老豆（十六小豆）なすびたちわけ最上（いんざん豆を もがみと云ふ）川、いなにはあらぬいな船の、さすか岩木にあらざれば、いかゞはせんと兩手を組み、思案してこそ居たりけれ、いやいや下手の長座敷、長居は惶れ評判の、落つる境と思ひ切り、取るものもとりあへず、御斷りぞとふりはなち、逸足出してにげんとすれば、左のおだふくしつかと引きとめ、是御二才の無作法な、田舍ものとあなどりめすな、さてもいやなる人さんちや、稻舟の唯乘りせんとは、どう慾な召し樣、只には得こそ立たせ申すまじ、恩を得て恩をしらぬは木石に似たり、情をしらぬは臆病の第一、二百旅食に百酒手三百宿賃、四百四の病の中にも吝氣臆病、金をしみ宿の代さへ御拂なくば、御士とは申すまじ、臆病味練のなされかた、武士たる身、金臆病程役にも立たぬものはなしと、義仲公のたまひし、今井忘は千騎がちから、腕におぼえた此巴、そなたも井上次郎にあらねども、御首の骨のきるゝまで、なにしにゆるし申すべき、女の中の豆男、嫩と云ふ字にさも似たり、わしはおまへをなぶるちやないが、さんざさんざ、あざみの花のいげ男、鼻は平潤（鼻の低くて押ひらめたる顏だち）あなをかし、なにを思案のべつそうづら（面相の至極をかしくて恰も今に泣き出しさうな風の顏付を云ふ）、いづくにさけて行平の、彼の松風村雨にてはあらねども、鹽くみかはす盃の、さしもよはひは二十五の、海人戀須磨の浦風に、吹かれて御色の黑砂糖、追付なめに島下り、さてもむ

ぞうや(可憐さ)さむからうと、ひよろりと出す舌の先、身もひねびねび肝もひねびねい、腰もぬけ首二つの化物、後ろ前より責めよすれば、詮方涙床に立ち、油の占木我からと、波のよるまに兵六が、身をくるしむるうたてさよ

六　兵六三眼舊猿坊に逢ひ大に辛苦する話

さて兵六は、やうやう松風村雨の戀路をのがれて、みのひとつだにおきどころ、なくなくにげて行く末は、又如何にと奈良芝の、芝の元(圖にあり)とは此邊ならんと、大息ほつとつき流せば、爰も陰氣の深草や、持留山の木陰より、おどり出でたる三つ眼、三眼天に輝き亘り、二足四足の族まで、遠きものは音にもきけ、近きものは目にも見

よ、三眼の舊猿坊とは、我が事なり、近頃立身して猴阿彌と名を改め、吉野御殿に召出され、月見花見の御遊の供、錦のしとね玉のみす、かけまくも忝なしや、御側近く召し仕はれ、實儀外聞此上なく、されば、こよ、世に所謂猿千年を經て、貌絣となり、貌絣一萬年を經ては、幸阿彌となるもの也、御城坊主の頭目となり、大廣間十八國主大名衆より、朝の進物夕の送り物、錦絹綾羅を着飾りて、常に醇酒の風呂につかり、あそこの諸候の御客來、又は朔望の御出仕、公界向き、幸阿彌かくては座配が出來ず、昔高家の吉良ではないが、幸阿彌出でねばお城内、大名席の頓着がつかず、かほどに威勢を振へる故に、金は倉にも入れ餘りたる目印に、眼は三つの錢目とな

り、髪には白銀の針をうゑ、眼はからかねの鏡をかけ、四方八方光り玉、光るといふも化けのうそ、いつはりのある世なりせば、おのづから、我等如きの化物まで、時を得顔はちとをかし、抑も我は幼の時分より、本阿彌光悦の敎を受け、修業の年月身につもり、かゝる姿となりてより、刀劍刃物はいふにや及ぶ、せと物、掛物、惣器物、合せて三つの目利を覺ゑ、茶湯生花砂の物、是亦三つの手にかなふ、然れども雨だれをふみて、筆法をさとるの才識もなく、又柳の葉末に飛び上る蛙を見て、手習を勉强する器量もなければ、文盲醜筆の名はかくれは御座らん、これこれ兵六、かならず貧者のさむらひだて、蜘手圃扇の十文字、竪横馬場にうろたへんより、拙者と師

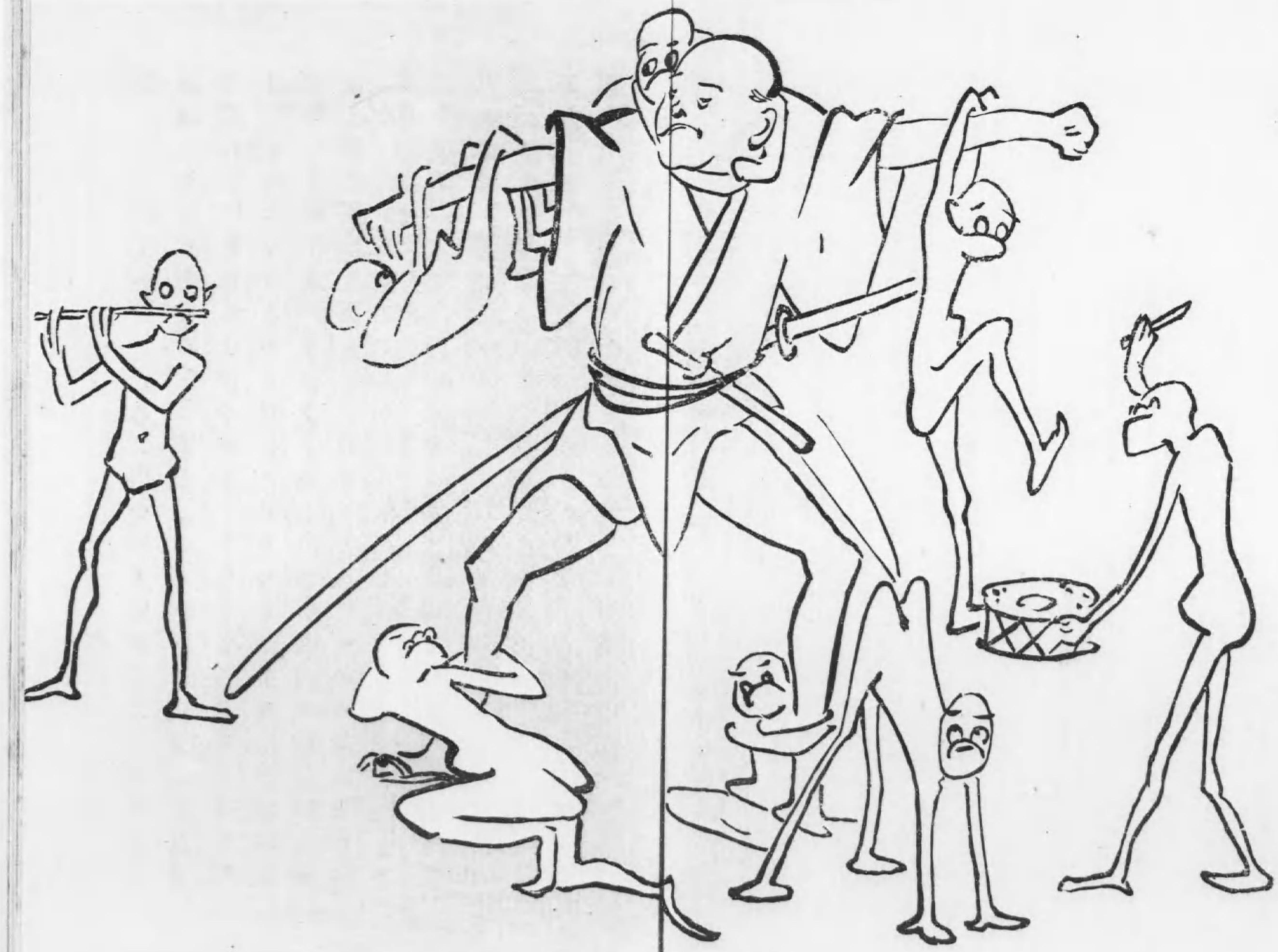
弟の約をなし、坊主になりて一生涯、座箒の柄をばにぎり玉（にぎり玉と云ふは睪丸をにぎり居るを云ふ）みがくきせるの夜通しに、近所隣の屋根くじり、紫原の唐芋ぬすみ、根を握り葉をひく大根の名も、天道のおそろしき科目もげにや、荒田（市内南部の町）なる、濱に鵜繩を引くあみの、度重ればあらはれて、浮名も鳥の籠細工、差しも差したる芋串刀、けふより早くぬきすて〳〵、彼の宇治の嘯山和尙が、佛意悟道の嚴命により、名醫の森本高見が、へんとこまかせ（へんとこまかせとは此處にて尤も力をこめて躰を運び動す時に云ふ）と立ち出で〳〵、雪隱（大便所を此處にてまなかと云ふ）のふみ板、さつぱりと、洗ひ清めて掃除したるは、何程の見識とか思ふ、早く馬鹿な忘想を觀破し、雪隱までは及ばずともゝおれが茶室の掃除をもして、似合せの四國猿になれよ

かし、そは今晩より是非共、拙者が弟子に取ると、襟元取りて引きつくれば、兵六雲を見尾の屋が、首の骨にはあらねども、いのちかぎりと引く弓の、ひけどもひけどもゆるしもせず、一尺渡りの三つの的、かけならべたる眼ざし、さしもの兵六たまりかね、石神木神竹の神、その名はさすがいはの神、武の田畝（今の市内武驛附近の一圓のことなり）の畦落し、甲突川の水くゝり、かくれ遊び（かくれんぼ）の天罰はゆるし給へとさけびける

七　兵六闇間小坊主より取圍まるゝ話

眼疾あるものはかならず三體の月をおがみ、心痛あるものは、かならず妖怪の鬼におそはる、茄子をふみて蟇と驚き、縄切れを見て、くちなはかと肝を消すも、皆是己の氣さわがしうして、本然の心氣修らざるがゆゑなり、されば何國にゆくとしてか、然も化物より惱されざるはなし、本心專らにして、氣丹田におさまらば、いづれの所よりか邪氣をひかん、扨て兵六は漸く三目のあやうきをたすかり、ふるひおそれて行處に、世の中は道こそなけれ、魔蟲原、山の奥にも化物ばかり、何と菖蒲の谷かげや、目口もよめぬつらつきの、小坊主一人あかはだか、歩むにつれてつけ來る、兵六急げば已もいそぎ、とゞまれば已も亦とゞまり、走る時は同しく走り、靜かに行けば小坊主も亦靜かに歩み、あたかも影の形にしたがふがごとし、兵六卒度とおぞけたち、聲あら〳〵かにいふ樣は、

やれおのれめ、何物の小伜ぞ、何の用事あつてか、後につき來るぞ、坊主が曰く、我こそは鞍馬天狗が落し子に、闇間小坊主といふものなり、此頃巣立のひよ子（子のこと）なれども、自然と備はる自慢の力、相撲は現に二十山から習つたぞ、いで試に勝負々々と力足、ふんで飛びかゝれば、おのれ似合はぬ小しやくもの、首に刀を引出物、只一打と侮りて、二つになれと切りつづくれば、ひらりとくゞる妻手の下、うなめ（輕視の辭）といつて突かんとすれば、弓手の腰へ飛びぬくる、是はしたり（云ふことばしまつたと）と岩の角、松の飛根はいかほども、切たゞらせざかひぞなき、其の自在なること雷光のひらめく如く、又熊坂長範が物見の松の戰に似たり、今は刀を投げすてゝ、大手をひろげて



捕へんとすれば、小坊主前に俯き曲り紫尻肛（肛門をばしりぢと云ふ訛て色に因りて名づく）をほてだてて、御峯入をいつもなさること承はる、大和ならねど吉野路や、御牧の馬のはなむけに、ぶんと一聲相圖をすれば、伏勢一度にどつと出て、久しく爰に松の下、藪のうちより土手の上、黑い小坊主、赤坊主、山吹色の口なしや、鼻くそ（病などわつちつて鼻のくづれ居るを云ふ）などが七重八重、九重までも取りかこみ、おのが同志を寄せ大鼓、手拍子取つてたぐりかゝれば、兵六やがていふ樣は、これはいかな事、ゆるしてくれよ坊主共、堪忍せよと働けど、皆青色の蜻子坊主、すひ付まい付かゝり付、爰は五月の菖蒲谷（吉野岡の奥）、蓬とはなれせんわいと、手足をさらへて引あみの、もれて出づへき樣もなし、兵六吃と

心付き、兼て習ひし光明眞言、此時なりと聲高々に、シヤシンの名號を唱へかくれば、手にもくらまの小坊主ども、茸に擽々しほたれて、程なく消ねてうせにけり、是れは不思議と見廻せば、初めておかしの小松茸、折り知りがほに生へ出でたるを、頭殘らず蹈み折られ、道の行くてにたふれしは、をしまぬ人こそなかりけれ、ゆゑなき迷の見よせより、偏に八百屋のなげきとは、後にぞ思ひ知られける

八　兵六ぬつぺつ坊が立ち塞がるを切通る話

扨て兵六は、光明眞言の功德により、くらま坊主があやうきをたすかり、七曲りの邊りまでだこり行きし處に金

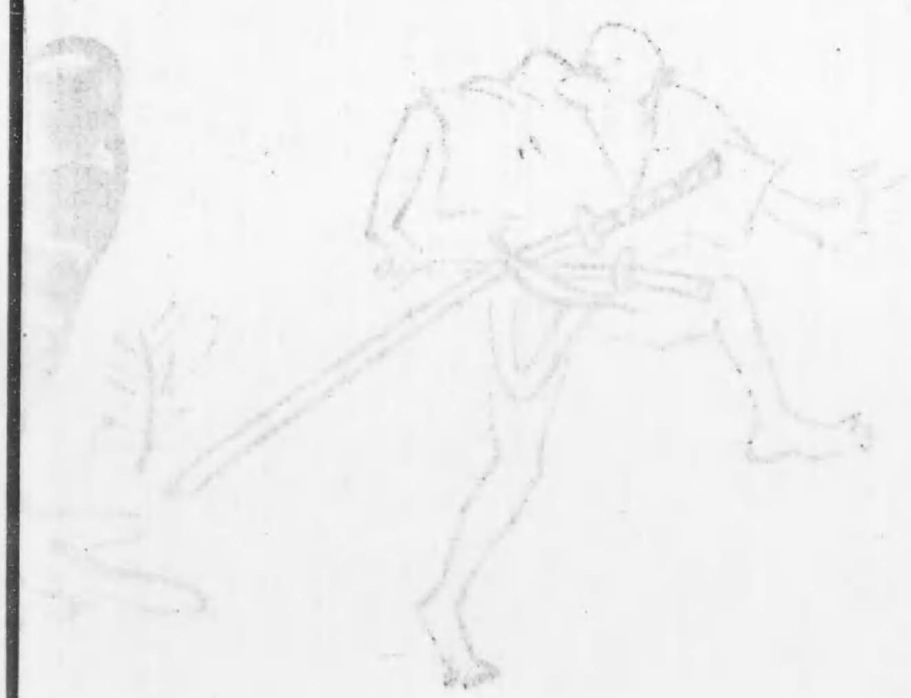
竹山のしげみより、かさね西瓜に、目口の付きたるやうなるもの、忽然としてをどり出で、抑もわれは事ふりたれど、鶯豹軒が弟、圓觀坊が嫡子、ぬつぺつ坊とは我事なり、大石殿に見參し、夜討の段の功名ばなし、緩々申し承らん、腰をぬかさず御物語り候へ、堀りつられたる穴かしこ、化生の者とな思ひ給ひそ、ほんに實正狐性院、こん〳〵 今夜はくはん〳〵〳〵 關山大師の御開張、あゆみをはこぶ女中方、都て町家の腹ふくれ、なほふくらかしてたぶらかし、人のあぶらの酒もりに、やがて浮名を取肴、澤庵漬や(つけもの)、附揚や(油にて摺り魚肉を揚げたるもの)揚豆腐のかはりに、貴樣の片足御供へ、供物御奉賀に預りて、精進上げを仕り、元氣をつくろひ申すべし、どうぞ給はれ玉

子割、山の芋（ムガゴの根即ヌカゴの根なり）さへ山藥師、阿彌陀や如來觀世音、唯我獨尊天と地を、流石御釋迦の誕生の如く、両手をひろげてをどり出づれば、此時兵六ちつともさはがず、立ちとまりこゝろをしづめて思ふ樣、定めて是も化け山賊、おのが迷の見寄せならん、其上ふるき夢ものがたりにも、聞き傳へたる鵞豹軒、且つ實正狐性院杯と、人も尋ねぬ犬の沙汰、どうやら彼が聲色に、くはんくはんといふ聲あり、旁以て不審の至り、たとへ八角の碁盤空哀を走る天狐なりとも、茅の毛衣打ちはきて、くれんものをと、刀の鍔元にぎりすくめ、目をいからしていふ樣は、扨ては狐か蓄生の、おのれ似合はぬ言語同斷、不屈もの、我が行先をさへぎるのみか、彼名人の書いておかれし言葉をぬすみ、ぬつべら坊とは何事ぞや、玉子のふはぶは人の肉、喰ふてもくはぬふりをなし、猶にくらしきたはけもの、いかほど爪をかくすとも、南泉院の軒猫、ただ一打ちに打ちころし、兵六が手並の程をしらせんと、三尺八寸無二釵にかまへ、兼ねて習ひし穴山流は、此時なりと飛びかゝり、寸滿先きと切りつくれば、ちんちろりんと鈴虫の、聲ばかりして失せにけり、跡に鼠の皮衣、取り落してぞあるにこそ、是れぞ實正狐性の業、秋の早田の穀積とは、夜明けて後にしられけり、名句をぬすむも猫だまし

九　兵六牛わく丸に出會危き目に逢ふ話

時は秋、所は山の奥ふかみ、四方の氣色もたゞなぬに、あたりの空をながむれば、一聯のむら雲、いづちともなく飛び來りて、やがて東西に散乱し、咫尺の間も見ゑ分かず、なまぐさき風さつと吹き通り、虚空に熱火の雨をふらし、天地震動してさながら神火の燃ゆるに似たり、兵六甚だ困り入り、松の木かげに逃げかくれ、夢になれよと身をひそめ、一分二厘と笑もせず、澁面つくりて居たりし處、修羅道の鬨の聲、矢さけびの音おびただしくいさごを飛ばし、巖を起し、岡谷をゞよまし、動震と出でし姿を見れば、其形祇園の鳶石（鹿児島祇園神社の庭に鳶に似たる大石ありき）に似て、眼は十五夜の月を奪ひ、光炯々として天をつき、腹は黄にして虎斑をゑがき、背中は眞黑にして疣多く生ゑ

、口廣うして鼻とがり、舌長うして紅の猛火をはいて、其のる樣、我こそは蝦蟇冠者が弟、牛わく丸といふものなり、兵六追討の命を承はり、牟禮の岡より逆落し、腰骨一つ打ち折りたり、さて士の御卑怯な、木の下蔭にかくれ給ふは、平家の公達忠度殿にそも似たり、川津の三郎はなきか、岡部の毒虫はおらぬか、あれ、こらまへてさしころせと、あたまかいなで、下知し給へば、兵六は十方に行きくれて、勇も力も槻弓の、居もならず逃げもならず、身をくるしめてなきわめく、聲も枯野の轡虫、かゝるうきめに大石が、武運の程のつたなさと、涙をながし俯き居たりし處、只一口と飛びかゝり、こんこんといふまゝに、兩手のうちに押しまろめ、目をかへしても呑



まんこせしは、尤も危き命なりけり

十　兵六足を赤蟹より挾まれながら和歌を送答せし話

去る程に牛わく丸に追落され、一の谷八島の敗走はまだおろかい、おそろしなんごいふべき段の浦ではかかるらん、是れより早く鹿兒島に逃げ歸り、時節を待ちて二度計略をめぐらさんこ、又立ち歸る分別は、最もすぐれて吉野山、關屋が谷まで來りし處、ふけぬるか雲も嵐もしづまりて、物にまぎれぬ谷川の、流れの音も物すごく、あらおそろしこ若木橋、こどろ〳〵こふみならせば、橋の下よりいら棒、差股に毛のはへたる樣なる手を、ながながこさしのべ、渡りかゝれる兵六が、足をしつかこはさ

み蟹、かねて思ひも設けねば、あわてふためき逃げんとするに、化物高く聲をあげ、やあ〳〵兵六おのれ人の心もあらるひす、吉野の花に狼籍するのみか、もみぢふみわけなく狐まで、情なくもこらへんとのわるだくみ、天罰何ぞむくいざらん、惣て此所は住吉、玉津島、明石の浦のひじり迄、集めて掛けたる三ヶの橋とて、歌道の極意、兵六も手をおけ、足は微塵になるかみの落ちかゝるまで、免しは取らせぬ、かくいふ某をなんぢ何とか思ふらん、百人壹首の六番目、山邊赤蟹あなかしこくも、和歌の名人、柿本の、人麿が、下にはたゝぬ、足引の山鳥といへる、古歌もあれば、いかで足をばひかざらん、生ひたつ田子のみづからは、切つてもくだけず、

もしも手向ひするものは、和歌三神の御罰を蒙るべし、
汝兵六、此世の思ひ出に、一首の歌をきゝ置けと、斯くなん
橋の下にきこゑける

このやつこ行くも歸るもとらまへて
引くも引かぬも足柄の關

兵六是れを聞くよりも、蟬丸にてはあらねども、ほつしゆつく（身に辛苦を感じ或は疲勞せし時に發する言葉にして多くホッショコレと呼ぶ）と息をつき、一生の世話を家持が、よみたる歌をとり替へて、かくなんと答へ侍りければ、かねてのたしなみあらはれて、いともやさしく聞ゑけるも再び

かささきの渡せる橋にすむかにの
あかきを見れば身ぞひゑにける

と泣き聲出して讀み聞かせければ、山部赤雲唱然として歎じて曰く、さて〳〵やさしくもつらねたるものかな、口傳の深き谷川に、渡せる橋のかゝる折柄、尤もすぐれて出かした〳〵此上は汝が足をゆるすべし、熊野午王紙を持ち來れと、はさみがねをばゆるしける、誠に天地をも動かし、目に見へぬ鬼神のたけき心をやはらげ、氣あらき人の心をもなだむるは、是皆和歌の德とかや、紀貫之が古今の序、いつはりならぬためしなり

十一　兵六吉野の山姥より追懸らるゝ話

夫れ心は萬境によりて轉ず、轉ずる所中と不中とあり、本然の性に隨つて、忍の一字を着得すれば、本心安堵し

て事に臨みて、苦しみもなく惶るゝ事もなし、凡俗は一生涯迷ふが故に十方塞がり、何れの所か、東西南北夜も、うば玉の暗に、往來の道もさだかならねば、兵六もあなた此方と分け迷ひ、ともす螢をよすがにて、足にまかせて行く路に、今時はやりの棒松の、木の下蔭にうたうやう

おちやれ喘さん小松の下に

松の葉ごとここまやかに

と、割れ半胴（半胴とは大瓶のことなり割れ半胴とは鳴りの悪しき響をなすを云ふ）の自慢聲、響きわたりておそろしや、こはまた何ものやらんと、ふり返り見れば、二目とも見ることならぬ大女房、かほには白粉を色ごり、唇には紅花をゑがき、誰が方よりかもらひけん、弓の鬢張、矢の根のがみざし、かつらのまゆずみ青

うして、とべらの狐臭ぷんぷんたり、鹿の子の小袖雲の帶、伊達をこざたる口元に、につこと笑ふていふ樣は、これ御二才樣、御名を誰とは白波の、龍田山にはあられねども、夜半にや君が唯ひとり、この山路をいづかたに、誰れ知る人のましまして、野べの篠原しのび給ふぞ、これよりさきは猫物騒、よしやわたしと、草の根の結ぶ手枕、ふはふはと不破の關にはあらねども、結句吉野の關屋が谷、谷のうぐひす人なれぬ、初音はづかしさりながら、四つの袖も一臥に、千世を一夜に、かたりあかさん睦言を、芝の元よりこなたなる、暫く爰にいねてなりとも、起きてなりとも待ち給へ、秋も夜寒になるまゝに、薪折りくべてあて參らん、冥の湯飯（土地霸をゆはと云ふ）でも調へて、御

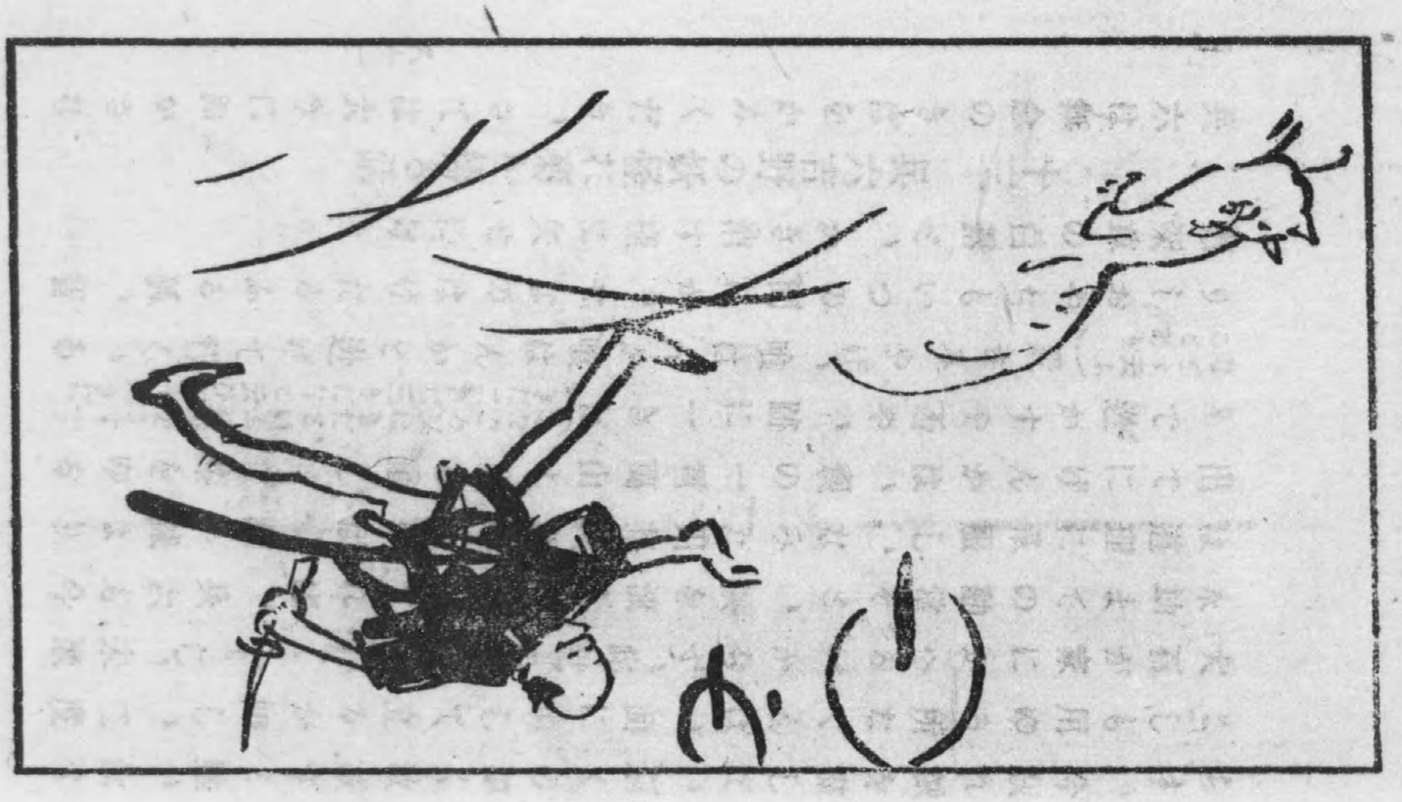
肌をあたゝめまひらすべし、こいふもやさしき束髪、かゝる景色は有明の、影すさまじき山中に、薪をおのが戀ひ妻木、秋山人なくして獨相求むれば、伐木丁丁として山更に幽なり、しかる所に大石の、家の氏神告げてのたまはく、粟のでろ〳〵お粥がならば、兵六はやうにげ、山姥ちやこ、のたまふ聲に打ち驚きて、あたりをつく〳〵見廻せば、人の心を陸奥の、安達原にはあらねども、人のかばね積んでおびたゞや、見るに身の毛も立ちあがり、取るものも取りあへず、これはならんと逃でんとすれば、山の上より途かに見つけ、今迄やさしき面影も、いつのほどにか引變へて、頭には棕櫚の皮をいたゞき、ひたひには枯木の角を振り立て、惡念忘想のちりつもり、忽ち山姥と鳴神の、落ちかゝが如くにて、あら口情やこりにがせしこ、ゆり分け髪の般若面、撞木ふりあげ追ひ來る、兵六今は詮方なく、只管に窮鼠の思をなし、神や佛に祈誓をこらし、一心不乱に南無妙法蓮華經と唱へければ、有り難や、山葛のかゝる恐しき惡鬼女も、只あかつきの露と消ゑ、忽ち狐の正躰をあらはし、よろ〳〵四つの足引きの、山また山に山めぐりして、行方も知れず失せにけり

十二　妖怪大石兵部左工門に化けて兵六を誑かせし話

有子が曰く生唐芋は咽につまの基、生學者は氣につまるの基、本たゝずして道ならざる孝悌は、夫れ馬鹿を盡すの本か、去る程に兵六はよもすがら、化物に苦しめられ、まよひの夢路未ださめやらずと、ほろほろと吉野山、麓の野べの花すゝき、ほのかに狐二匹を目にかけ、わつこ（相手を見下して呼ぶ詞）おのれが仕業よと、刺毛草荆棘原いはせもせず、唐土の虎伏す野邊のすゑまでもと、勢を限りに追ひ詰めて、已に茅毛の狐を、ひざに押し敷き、大段平を妻手にぬきもち、只一突きにと振り上げし處、狐の運やつよかりけん、やれ、まて兵六、はやまるなと、後の方よりはせ來る、人を誰れぞと見かへれば、兵六親の兵部左衛門、忽然として杖にすがり、聲をあげていふ樣は、いかに兵六、その方は二才の中間とかけものし、父にも母にも知らせずして、吉野原の化物退治、いらざる貧者の男達、世のあざけりを招く媒、我かねていひきかする通り、山阪達者の仰出は、天正年間前方のこと御條書に有之今かゝる文物、祥明の世上に生れ、野鄙文盲とは、いひわけなし、思へば汝は、年老ての両人が、中の兒素立ち、月よ花よと愛でし子の、怪我あやまちでも仕出しなば、婆尉がなげきはいかがせん、いたづら遊は、當時第一の御法度、萬一諂ひもの〻口進物に逢はゞ、親兄弟の身の上迄かゝる、やをれ汝はかゝるうつけものとはおもはざりしに、扨ていかなる了簡違ひか、過ちを知つて

改むるに憚らず、己に若かざるものを友とする事なかれとは、論語の教、汝速かに二才中間の咄を引き取り、まして言葉のおとなしく、提げ緒の附鬚尋常に、めしの喰様酒の飲方、見苦しからぬが第一の早業、鎚長刀も及ばんぐゝ、師走の兵法なまきずの本、早く武を捨て、二ちんの一、三八二十四年にもならば、妻女をもこらせ、家督をも譲るの了簡、そら承知したか、この上はしつかりと、魂を入れよ、ひたすらに三斗三六(藩代一俵四斗を三斗三升六合入として下附されき)を書き習ひ、作九一を肝要に覺ゑ、若しも御縁に大石が、藏のゆかりもあるならば、たとへ草履を取つてなりとも、御足をかついでなりとも、立身せんと思ふ一念、早く奥齒に神佛、願をかけて賴むべし大理髪小鬢は(血氣ざかりの武士が耳の上に一寸ばかりの髪をのこして後ろに折りに結びしもの一般に斯る士は着物は膝上までに短くし寒いとて今の士の如くにッポンを穿かず足袋を着けず武者ぶり頗る元氣活發なるものなりきと)當世にはやらず、峯の小松を風が吹く、ひとり立ちして世にはすまれず、時世々々に隨ふは、弘法大師一卷の教、時を知らぬは大馬鹿もの、貧者になるの基なり、此處を能く勘辨して、一度身を立て、ふたりの親を安樂に、燒酎のなせ酒のませ、老を養ふ思ひはないか、惣して今夜は壇谷判官高貞殿の御逮夜、大石の家には忠臣藏以來、さし知れたる氏神、手を出して足を戴く蛸子肴さへ、むねがつまるに、增してみすみす殺生せんこと、神明佛陀の恐も深し、平に免してにがせがせ、殊に知らずや、狐といふは百獸の頭にして且仁あり、かるがゆゑに禮記の中にも、狐死して岡に枕るとは、仁なりとほめたまへり、

親殺さるれば其子かならず死す、其上狐は稲荷大明神の御眷屬にして、御家に對しても由緒あり、汝が知る通り、攝洲住吉御誕生の折柄より、所々の御靈驗、あげて數ふるに遑あらず、況んや高麓入りの御時をや、忠は釜山の項より高く、義は、泗川の底よりも深し、萬一それを殺さば、上樣に不忠の至り、且つは親への不孝なり、不忠不孝の子は、天地の間に入れられず、殊に子を思ふ迷ひの闇の深き夜に、野邊の篠原踏み荒し、深草の露をこぼちて、遙々と此處まで來る父が恩愛、有難しとは思はずや、されば大賢孟子の金言にも、腹一盃の粟の飯、飽迄喰ひ、木綿衣裳でも暖かに着重ね、其上教ふことなきときは、禽獸に近しと宣はずや、禽獸の子は我か願にあ



ちす、今我れ誠を盡してい斯くの如く教戒すと雖、汝すこしも用ゆる所なくんば、面に垣して立るが如し、二度大石が家にかへるべからず、此世の對面かなふまじ、未來永劫までの勘當ぞと、涙を流して教戒すれば、兵六も今は道理に承服し、なみだ川其源を尋ぬれば、誰か誠より出でにげんかは、親の一言萬山よりも重しと、膝をゆるめて逃かすや否や、跡に一きだ（きだごろ又はきだといふは糞をさす一きだ二きだ三きだなと云ひ又十八きだなどゝ云ふことあり）置きみやげ、喰はんか喰はんかと逃げて行くゝありしおやぢもいつの間にか、せなのはげたるふる狐、智惠深草の白露と、かき消す樣に矢せにけり

十三　兵六吉野の妖怪に菊を縛る話

兵六は無念のきばをかみくだき、さては大きにぬかされ

たり、此無念をばはらさずば、いつの世にかは浮ぶべきと、地のそこまでもと追ひ行けば、狐も今は逃げかねて、小松が原にはしりこみ、ぐるり〳〵と三かへり四かへり、かへると見しか、忽ち人姿となり、葛の葉取つて打ちかづき、尾花のかんざし、落葉の櫛、世にも美し紫の、元結にかゝる黒髪は、顔にこぼれてはら〳〵と、芙蓉のまなじり丹花の唇、いとゞ匂もなつかしき、菊と桔梗の裾ちらし、どちらが姉どちらが妹、いづれもおとらぬ二人づれ、旅のつかれの恥かしと、袖うちかつく有樣は、さながら楊柳の風になびき、梨花の雨にうるへるに似たり、いかなる巖屋のひじりといふも、などか心を動かざらんや、まことに久米の仙人も、通をうしなひ、雲

間に足をふみはづして、落ち給ひし古き例も、げにさもありつらんかし、されば賢きより聖にもうつさば上達すべし、雀より蛤ともならばなるへし、螢も元はくされ繩、是れはたまらん〳〵と、いふにいはれぬ轟兵兒、轟も今は抜け替はる、浮世は車木綿機、我が本心をとらかされ、引き廻されて夜もすがら、まよふ心の一筋に、二才咄を思ひ捨て、友朋輩のあざけりを、身に請くるとも是よりは、よしやよし、吉野男と業平の、澁帷子は垂衣狩衣、頂天鉢巻、折烏帽子の思をなし、爰に一首をつらねける

千早振神代もきかず茅原に
掛る千草の花も有りとは

月やあらぬ春や昔の兵兒仲間
引いて吉やといまは業平

又女返しと覺ねて

かきくらす心のやみの透間より
野狐つきしと法者さだめよ
おきもせずねもせで夜を明しなば
さぞ御難義の筈こそあらめ

誠に男と女の中を結び、たけき兵兒の心をやはらげ、おそろしき化物の心をよろこばすは、和歌の道より勝れたるはあらじと、自慢のくさき糞柄拗、すごし取り柄やのこりけん、心に急度思ふ樣、夜中といひ、村ばなれといひ、當時物騷の吉野山、殊に女の供人をも伴れず、がて

んの行かぬ事共かな、定めて狐の化けそこなひ、いで押し倒しつき殺し、いたみの程をしらせんと、腰のつるぎをひねくり廻し、走り掛りていだきつき、心地吉野の山蔭や、小芝の上に押し倒し、得たりやおうと踏み付けて、切つて失てんと一人の、腕をとりてねぢ付くればあらよ〳〵（土地の婦人の嘆きの詞）となきさけび、扨て〳〵むごい御兵兒樣、是無作法な、不行儀な、田舍ものとてあなどりなされ、夜鷹なんどを捕へた樣に、道端なんどで懲らしいやしめて、下されますな、我も名のある花の種子、ひとりは桔梗、ひとりはお菊、皆隱遁の家にかしづき、浮世の花の色の道、未だ白齒の女子列、夜中と申し又人ばなれ、御疑は御尤、今は何をかかくすべき、御存の通り今年の春の時分

から、目出度はやる御疱瘡、かろくせんこの御守札、申し請けんの一念に、帖佐米山御藥師樣へ今朝はや出づる旅衣、はる〳〵參詣仕り、つれなるものも多數なりしかど、皆々重富脇元邊の茶屋遊び、わたしふたりはぬけがけして、道さへしかと白銀の、名に負ふ坂を分けのぼり、急ぐことすれどはかどらぬ、道のゆくてのきり〴〵すゝわたしが好きのいなご蟲、こり〳〵なれば面白やこゝ、おもふか内に秋の日も、程なく暮れて吉野山、あなたこなたと分け迷ひ、漸く是まで來たわいな、是れより家路も程近し、どうぞゆるして下されませ、衣裳がよごるゝ、母にがらる〳〵(叱られる)無理なることはめさぬもの、蟬の羽衣ひとへに賴む、重ね來て見よなるまいかこゝ、誠しやかに口

倣古寫本 斗秀

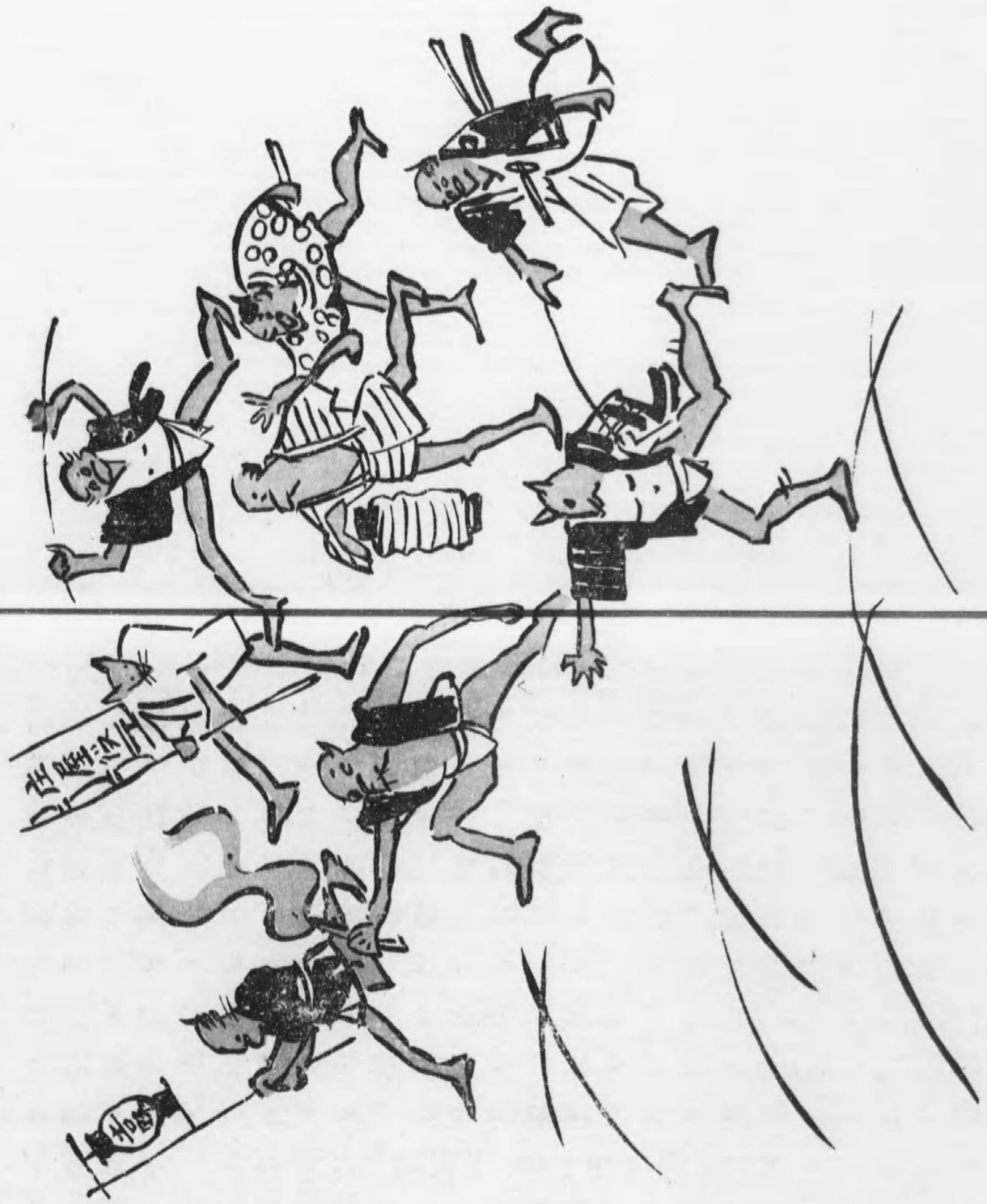
説けども、兵六ちつとも聞き入れず、何をぎろ〳〵はね廻る、いらぬ女のものいひだて、身のわざはひをまねぐなかだち、只一しめにしめ殺し、皮むしりはぎ毛寶藏袋、舌はひきぬきかば燒きに、たつた一なめすこん〳〵と、鹽口もなく、ねめつくれば、今はお菊もせんかたなく、扨ていかなる惡日ぞや、よもすがらまよふ、山路を分け出でて、うれしと思ふひまもなく、此の修羅道の苦患に遭ふは何事ぞ、骨がくだくる痛いわいのう、ほんにつれなや情なや、爰はわたしが最後の地、おまへは早くにけ歸り、此よしかくと親たちに、殘らず語りて給はれよ、いざおさらばとたゐ入れば、連れの桔梗はあとをふりかへり見て、かひなき事を宣ふな氣をしつかりと持

ち給へ、わたしはこれより、直に吉野村庄屋役場へはせ行きて、此有樣を岩田帶、帶迫(關に)ありとても遠からず、追付たすけの迎籠、さすが私も士の娘、死しては一所といふ霜の、とけたる帶をむすぶ間も、なく〳〵ひとり帶迫の、庄屋役所に走り行く、女なれどもたのもしや

十四　吉野村庄屋駈付兵六を捕ふる話

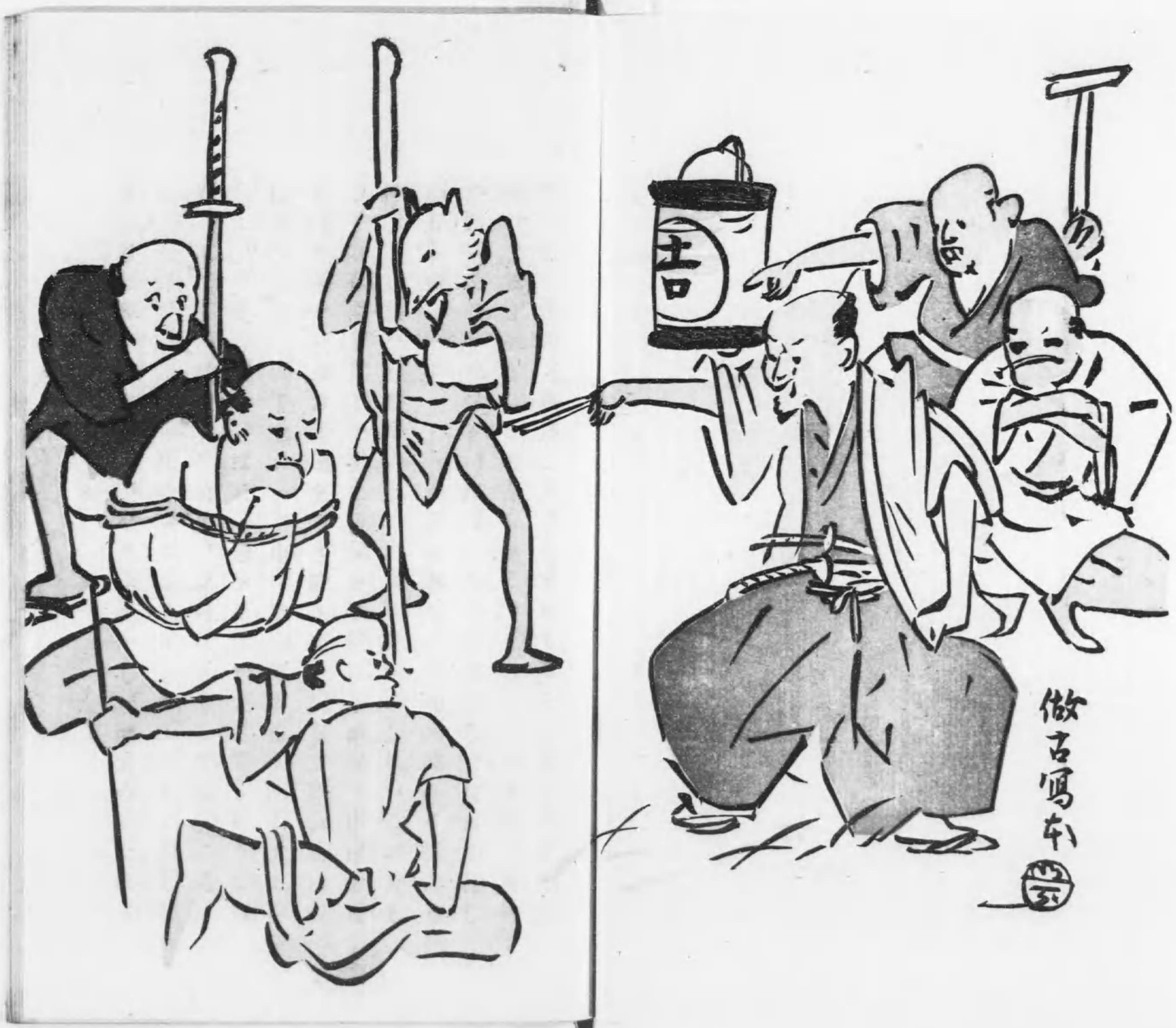
むざんなる哉お菊こそ、何をとがとてからめられ、櫻が枝にくゝられて、無念の涙しやくり上げ、こゝろの中に兵六を、鬼よ蛇よといふだすき、かけてぞ頼む神のばち、いつかむくひのあらざらん、傳へ聞く釋の雪舟さまは、和尙のいましめ稠敷して、寺の柱に我が如く、身をくゝられてありながら、手水の水を口にくはへ、眞妙の上に落し給へば、その儘一念の百足となり、繩をときたる例もあり、身は雪舟にあらねども、我も吉野の霜狐、寒さ痛さはみなおなじ、其儘鼠とも虎狼とも形を變じ、心に染まぬ色の繩、たゞ一かみにかみ切つて、あの兵六がのどぶねに喰ひ付殺してくれたいのう、助け給へや神佛、免し給へや天道樣と、恨の種子の數々をむねの間にかきあつむれば、猶くるしむるぼんのうの、繩おのれとしめてたへがたや、かゝりける處に、當村の庄屋牧野駒右工門、桔梗が注進聞き屆け、それのがすなからめ取り、早速城下へ引き出し、褒美の錢をいたゞかんと、意氣をつめたるしきりの両貝、谷より峯に山彦の、おのか手下の若

者共、名主小觸はいふに及ばず、すゝきの穂鎚をてん手に持ち、なた鎌山鍬どんちの柄（とんちは地を平らすことを云ふ此處にては其器具）とり〳〵沙汰する觀音の、佛の威勢を鼻にかけ、木山竹山葛山作障りなんどは、伐拂ひ〳〵てぞはせ續く、去る程に庄屋其夜の出立には、狐の皮の長羽織、はうろく頭巾を横ざまにかぶり、瓢箪どんこつ腰にぶらさげ、刀大小茅薄、業末に露の銀鞘尻、かゝる時節にいそかずば、いつかほまれを顯さんと、御牧の駒のうそ月毛、手綱のかいくりもろ鐙、ゆるぎ合せてしつかりと、馬の腹帶引しめて、隊伍を乱さずはせ續き、大音あげていふ樣は、やあやあ其方、夜中猥りに人の堰を引きとらへ、こゝろのまゝにおしかんざう、此頃取沙汰あしき吉野村、御聞合もこれある



こころ、扨てはなんぢが仕業ならん、名を何とかいふ、あり様に白狀ひろげ、異儀に及ばば下役共、唐芋畠にふみ倒し、ごんぢすくめに打すくめよと、無實の繩をかけんとすれば、兵六些共屈せず、膝立て直し、思ひもよらざる御うたがひ、それがしは大石兵六と申して、御城下の直勤の大番士、終夜化物に苦しめられ、前後當惑の身の因果、殘念至極に存じ居るところ、年古る狐二匹つれを目にかけ、鹿を追ふものは山を見ず、いづくまでもと追ひ行きし所に、あの松蔭より、此女如狐々々（によこ〳〵は平氣にて出る姿）と罷り出でしにより、是れも篠田の葛の葉ならんと、捕へて押へし人ちがひ、言語にあまる無調法、何とぞ御了簡の一筋もあらば、末代までの御情と、地に鼻つきてわぶ

れども、もとより自慢の庄屋なれば、ちつとも耳に聞き入れず、ぬけ〳〵としたるいひ分かな、其手はくはぬ、早く生け捕り縄掛けて、むくひの程をしらせよと、言ふ聲いまだ終らざるに、舎人權右工門といへる若狐、はせかゝりて終に縄をぞかけたりける、あへなくしばる高手小手、刀大小もぎ取りて大地の上に引きすうれば、駒右工門近々と進み寄り、それ見たか、汝より出でしものは汝に歸るものなりとは、曾子が格言、誠に然りときくの葉の、露も科なき女をとらへ、思ひかけたるいろの縄、むすびもあへぬ其隙に、最早汝が身に歸り、かゝる憂き目を見るも天罰、必ず報ゆる輪廻の道理、いろに迷ふものは、自縛の縄にくゝらるゝとは、汝がことなり、こつちに


吉
倣古寫有

恨は葛の葉の、枯葉に置ける露理もなし、罪を作りし小車の、我身をうしとてうらみぞ、やあ〳〵家來共、夏見川原にひこずり行き、此刀にて一寸だめし、なぶり殺しに打ち殺せ、早く〳〵と聲をあげ、下知を加ふる折ふしに、不思議や心岳寺の狐怪和尚通りかかられ、このめしうどの有樣を見て、笑止の涙を両眼にうかべ、庄屋を近く招き寄せ、事の仔細を聞き給へば、駒右工門かたはらにひれふし、両手をついて申す樣、此者は大石兵六と申して、曲者の隨一、或時は勤學法師が琵琶聞きにこと寄せ、雀が宮に酒盛りを企て、或時は寺山に夜獵引と名付け、吉野の山にしら波の、よるひるまぎれ來り、さまをかへ名を替へ、人の妻子をたぶらかし、燒酎のみたほす

其上に、世間の取沙汰には、化物の業と申し觸れ、いよいよ憚る所なく、ほしいまゝに道樂を盡し剩さへ日々に隣の鷄を盜み、今年を待てども改むる事なきにより、子そだつ家に事をかゞせ、就中進物數寄の郡奉行、其他諸檢査方へ、付け屆け用の玉子迚も、夫故相少く一つ二つづゝの算用も違ひ、むねをこがやきふはふはさへ、くわんく〳〵と御奉行に、毎度しからるゝも、皆こやつがなす業、春は蕪夏は西瓜、秋はから芋冬はみかん、四時の盜みの、因果の果の字、只今のむくい、しかのみならず、兎をころし、狐を狩り、手わるき事の數々をするにより、此頃往來の道もこれなく、依之御上の御詮議度々なりといへども、相知れず、私共聞合の耳をひそめて罷り在りし所、幸今夜岡野猪之助が娘、桔梗こやらが、注進により、時刻を移さず、馳せ參りたる所、かく〳〵の仕合せ、誠に以て言語同斷の振舞、披露をこぐるは、御上の御厄介、書物一通筆紙の費、文字の大小色々香色、六かしき事のみ多し、しかしいのちをなまでろし、めくらが谷に落し入れ、兵六同志のやつばらが、見懲らしにせん拙者が分別、披露紙一枚も損亡もたゝず、先々右之通の振合に付、少しも〳〵御心配あそばさるなと、胸に邪心の卷舌にて、物になれたる自慢顔、恕りをうつして申し上ぐれば、和尙つくつく聞き給ひ、庄屋殿御立腹の程尤千萬、さりながらいまた、廿に足らぬ兵子あがり、一旦のあやまちは若氣のいたす所、何とぞ此節迄は勘忍の、胸をさすり下

して、兵六の一命をたすけたはんや、拙僧が通りかゝりし此上は、見殺しにしてはさし置かれず、難をたすけあやうきを救ふは、出家の役目、殊に今年は奈須野原の狐狩より、うそ八百年忌の御吊ひ、一室小庵こいへども、追善讀誦申せとの御綸旨、拙者儀もとよりいただく九條の袈裟、かゝる佛法さかりの年がらにては、小魚微蟲のひけさきとても、たすけゆるすは無量の功德、いはんや人萬物の靈なるをや、人ごとにひとつのくせはあるものを、僅のあやまちを以て、大功ある人を殺すは、仁政のなさざるところ、貴殿此村の頭役として、甚だ不行屆の至なり、いにしへの賢人君子は然らず、たとへ重き罪科に行ふべきほどの者も、又よき一つの取柄あるものならば、

罪をもかくしさし置きて、我と悔いさとりてあらためしめんことを欲し給へり、今は世間無事なる故に、人皆不仁にして物を愛せず、只おのれを利するを專にして、人のいたさを知らず、かるが故に人の非を見、人のあやまちを聞き出すを以て、已が智とせり、甚以當節仁治の罪人なり、もし毛を吹きてきずを求め、好んで人のつみとがをさがし、理屈を以て穿鑿をとげなば、恐らくは貴殿をはじめ、直ぐなる人は多くは侍らじ、いはんや士の子は治世の時には三尺八寸、さしていらざるものなれども、世間さはがしく、國家あやうき時は、第一用に立つべきものなり、何ぞ愛することを子の如くならざるや、其上山坂かけ引、水練の達者、角力腕押し、早走り、惣じて難儀苦

勞の稽古業は、皆一身の心掛にして、壯士の專ら事する所、出家の身にさへ、別けて殊勝に存ずるなり、容貌少しは粗暴なるとも、花車風流にして、女の如くなるよりは何れ、又履物のつよからんよりは、身息災にして足達者ならんにはいづれ、さらばとて世にたがひ、人にすねるは却つて臆病、是を野人にたとへたり、抑も文といひ武といひ、柔弱にしては成就せず、いはんや出家嚴律の禪宗をや、勇猛堅固の心なくんば、何に依りてか教を施さん、我今弟子數多き中にも、心印を傳ふべき器量の者獨りも是なし、故にか〳〵る氣前の弟子を得て、我が宗の衣鉢を授け、ふる借錢の首尾をもとらせて、死後の望をかなへんと、日頃願ひ居る所、今夜の樣に行當るも、いかさま、前世の契約ならん、孔子は子路を得てより、惡聲耳に入らず、我も兵六を得たらば、犬の聲穴に聞ふまじ、此故に平に愚僧に給はれよ、改めし上は何のくもりか侍るべき、惡につよけれは善にも亦强く、あやまちにやすければあらたむるにも亦やすし、いはんや御經にも、惡をひるがへせば即心成佛と說き給へるをや、自性もと二つなし、所謂大極理一、新注學者の精魂限り、說く所本然の性是なり、一念心頭に善根を生せば、萬劫無邊の罪業、忽ちに消滅すべし、提婆が惡も觀音の慈悲、はんとくが愚智も文殊の智惠、兵六が命も拙者が所望、科ありて人を切るとも輕くすな、殺人刀活人劍、いかすも殺すも貴殿の手の中、かへす〳〵も御願ひ申す、偏に二重に

衣の袖の、あらん限りはかぶせて助け置き、後は又坊主になし、佛壇ふかせ味噌すらせ、かねをちん〳〵だまし付、木魚そろ〳〵打ちこすり、鬢の毛すくなき兵子一才、あたまを心のまゝになぶりはぎて、じんばら〳〵ばらみつだ、蘇和加心經一貫さへ、覺ねさすればたつた一日、錢五百、供養施餓鬼の布施ものにあづかり、錢宗米宗進物宗、古註宗旨の中にても、錢宗遍山する所、江戸駒込の狐性寺、又は丹波の妖怪寺、次には甲斐の怪物寺薩洲谷山怪德寺坊主所帶の爲には、結句吉野の心岳寺、予が跡職にても願達せば、法統血脈相續き、傳燈相傳はりて寺門繁昌、立春大吉我も立身、大狐此上なき大願成就、されば功成りて身退くは天之道、則拙僧は隱居幽栖之身

なりと、下納屋町の魚店棚のしたに、藏觸軒の小穴を建立し、爰に安らかに身をかくして、不斷市中の大犬と化け、木魚のかほりに我は生魚、喰はう〳〵〳〵、いはしのあたまも蛸の手も、腹にあくまで光明の、眞言がらか、こゝろがら、光をさすがの大和尙、決定したる顏色にて、無理に勘忍し給へと、泪を流しの給へば、仁者に刃むかふ言葉なく、荒野の牧野の牧野駒右工門、しほしほと折ちしほれ、誠に能化と申し所化と申し化ると言ふ字は、いづれの筋、打捨られぬ和尙樣の御所望、なにしらぬ田舍庄屋の身の上なれど、物の道理は神佛、已往は咎めず、御慈悲の深き旨にまかせ、にくしと縛る恕りの繩、とけてぞゆるす谷かづら、くりかへり立ちかへり、幾度跡を

見かへりつゝ、おのが役所に歸りけり、兵六は是を狐の仕業とも、夢さら〳〵にしら露の、消ねては草をむすびなん、生きてはなにとむくゆべき、誠に和尚の御高恩、肝に銘じてありがたや、命の御主法の親、七世末代忘るまじと、すごすごたちて兵六は、いらぬ狐の狩衣、裾の塵をば打拂ひ、御駕籠の跡に從ひて、御供申して行末は、心岳寺山にぞ入りにける、昨日までは暴虎憑河の勢ありしも、今日はとなりて生をむさぼり、命ををしみ、肩をすぼめて、思をこがし、胸をふさき、他人を恨むる葛かづら、自らしめて我が身を苦しむ、世間の小人又斯くの如し、是皆心術の正しからざるが故なり、患難横逆に遭うて、終に節操を失ふ、あさましかりける事共なり、

只君子のみしからず、年寒くして始めて松柏のしぼむに後るゝを知る

十五　兵六妖怪に引かれ寺山に入りて坊主となる話

一樹の蔭にやどり、一河の流れを汲むも、皆是他生の縁とかや、いはんや兵六は、狐怪和尚の慈みに依りて、虎口の危きをたすかり、喜悅の色なゝめならず、後には如何になる身とも、いさ白雲の七重八重、九曲りの坂を下り、はじめて御寺の境内を見れば、道は松杉に入りてかすかに、寺は人家をへだてゝしづかなり、後ろには高山巍然としてそばだち、前には大海湛としてたひらかに、伽藍縱横鶴翼をつらね碧瓦朱甍魚鱗にたたみ、櫻島のいた

だきには、香煙たゆず天上をふすべ、大崎の鼻には梵聲音を修して、龍宮を驚かす、釋迦堂の上段には、いづくよりか渡らせ給ひけん、ふるからかつの杓子を安置し奉り、左のかたはらに彌彌勒佛と覺にて、御主殿南瓜のしたたかなるものをつきする、右脇は一段さがりて、闇魔王拳を固めおはします、則是は赤唐芋の筋多きにて、千手の勸音には、山蜘一體見立てたるもおもしろく、十三佛には里芋三かぶ、取合せたるこそ、おかしけれ、各百合の根の蓮臺にめされて　女郎花のはな黄金をかざり、眞萩の露玉をちりばめ、其外大小の仙佛達、（男色盛なりし時代稚兒好きの甚しかりしこと才を戯れて仙佛どんと云ひき）野邊の千草の色々樣々、たたせ給ひて、光かかやきわたらせ給ふもたうとし、鐘樓の撞鐘ば、

帖佐鍋（帖佐にて鑄る鍋あり）の三升焚を釣り上げ、變化八年松尾伊右衛門これを寄進すとあり、山門は遙こなたに結構を盡し、蛇の卷柱は加世田大工（鹿兒島を去る十數里にあるの村落にして昔は多くの大工を出せりと）も手をつかねい、蜴蜥の卷龍は鳥居如見も筆をすつべし正面の額は野狐殿の三字を彫付け、うつしの花の紺青を込め、傍に支那の老比丘、百丈彈師の名印をすゑたり、群犬山門に入ることを許さずの七字は、近代の名僧日州の狐穴和尚の墨蹟とかや、山遠くして雲行客の跡を埋め、松寒うして風旅人の夢を破る、狸の腹皷七つを打ち、鷄鳴己に曉を催せば、人境狐巣共に靜にして、志氣おのづから晴明なり、しかのみならず、前栽のただずまひは、木立物ふりて色々の源氏鉢をならべ、數々のへけ石面をあらそ

ひゝ怪を獻じ珍を奉ず、小便一筋やり水の音、さく〳〵と流れて、扨ても清しと岩をあらひ苔も自然とふる狐、おのれさかさまたち姿（狐の化するときは種々の形をなすと云ふによる）さながら石燈籠の形に似て、五疋つるげば（つらなること）塔をすゑ、四疋ならべば橋をかけゝちんと（ちよいと）まがれば獅子香爐、くわんとおらべばかねの聲、こんとさけべば雲版の響、招く姿は糸薄、尻尾はさながら久米蘇鐵（縣下大島にある島名と聞く大島はもとより蘇鐵の名所なり）花は咲かねど葉は見事、もし又東山の近邊ならば、義政公數寄屋の御庭にうつされなんものを、殊に勝れて目立ちたるは、手水鉢にて留めたり、何ぞと問へば、吉野川の川童（かはわろ）なごまでやとひ來て、かしらに水を湛へたれば、さらさら石に異ならず、是を其の儘軒端の下によせ置けば、い